

375.9  
 Oc8  
 資料室

訂修  
 中等國語讀本  
 森合直文編  
 萩野由太郎補  
 卷七

41995  
 教科書文庫

4
810
41-1912
20000 65216

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak





I rely <sup>on</sup> my self

資料室

375.9  
008

訂修 中等國語讀本卷七目次

一、忠信の義	.....	一
二、今上天皇御製（和歌）	.....	九
三、花の譜	.....	一一
一、梅	.....	一一
二、雪團	.....	一一
三、芙蓉	.....	一一
四、朴	.....	一一
五、瞿麥	.....	一一
四、振天府拜觀の記	.....	一七

永井繁造

訂修中等國語讀本卷七目次





五、	聖駕の凱旋を賀し奉る表	二五
六、	北京の光景を報ず (書簡文)	二八
七、	宇治河の先陣 その一	三一
八、	宇治河の先陣 その二	三九
九、	平家雑感	四七
一、	都落	四七
二、	清盛入道	五〇
一〇、	山時鳥 (俳句)	五六
一一、	十八樓の記	五八
一二、	筈あらそひ (狂言)	五九
一三、	丈夫の志	六六
一四、	自警 (格言)	七一

一五、	白石と宣長	七三
一六、	門を造る説	八〇
一七、	そぞろごと	八四
一、	雪の朝	八四
二、	青き眼	八五
三、	過ぎにし方	八六
四、	賤しげなる物	八七
五、	見ぬ世の友	八七
一八、	熊野落	八八
一九、	舊都の月	九六
二〇、	月夜逗子より友人に寄す (書簡文)	一〇〇
二一、	荒野の末 (和歌)	一〇六



一一二、 故郷 その一 ..... 一〇八

一二三、 故郷 その二 ..... 一一一

一二四、 諷諭 ..... 一一八

一、 石清水詣 ..... 一一八

二、 獅子狛犬 ..... 一一九

二五、 國民の抱負 その一 ..... 一二一

二六、 國民の抱負 その二 ..... 一二七

卷七目次終

修訂中等國語讀本卷七

一 忠信の義

臣、謹んで講ず。孔門の諸子、みな、徳行を務む。顔子は純粹、その資高し。聖人を違ること遠からず。その次は閔子騫、仲弓なり。然れども、能く、孔子の道を受け傳へたるは有子、曾子にして、就中、曾子は篤學力行を主とし、その工夫最も切實なりとす。吾日三省吾身、爲人謀而不忠乎、與朋友交而不信乎、傳而不習乎、といふものは、その、毎日猛省痛治するところの實行な

顔子 名は回、字は子淵。一七八年。

閔子騫 名は損、字は子騫。二五五年。

仲弓 姓は冉、名は雍、字は仲弓。一三九年。

有子 名は若、字は有若。

曾子 名は参、字は子輿。一五六



吾日三省云  
論語學而篇に  
出づ。  
亞聖  
顔回をいふ。

り。蓋し、曾子は、質、魯鈍なりしかども、その聖人に親炙して、教を受くるや、遂に、その道を傳へて、亞聖の次に列することを得たり。而して、その自修の要は、忠信と傳習とに過ぎず。何ぞ、その簡約にして、近切なるや。

朱註  
宋の朱熹の註  
なり。

それ、忠信の二字は、千古の確言にして、三尺の童子も、これを口誦することを知る。而して、その意義において、これを體認するもの、蓋し少し。臣、請ふ、これを述べん。忠信、これを約言すれば、誠となる。これを折言すれば、忠は、おのづから忠、信は、おのづから信にして、意義各別なり。又、忠信は、誠に至る所以にして、誠は、忠信の至なり。故に、朱註に、「盡己之謂忠、以實之謂信」とあり。これ、伊川程頤の説にして、忠信の義を説く、最も

惟神

伊川程頤  
宋の儒者。字は永叔。晩に、伊水の上に居りし故に、伊川先生と稱す。程頤の弟。(一六九三年一七六七年)

明道程顥  
宋の大儒。字は伯淳。明道先生と稱す。(一六九二年一七四五

適切なりとす。明道程顥は、發己自盡爲忠、循物無違謂信」と説きて、その忠信に著手する次第、較明細なりとす。

臣、反復、これを思ひ、謂へらく、忠は己が有らん限を盡して漏さず、義に適當するをいひ、信は、心のありのままを、言にいだして、隠すことなく、道に違はざるをいふ。忠と信と相合ひて、心の主となり、すなはち誠となる。誠は天の道なり、自然にして誠なるなり。誠を思ふは人の道なり、これを思ふは、人の所爲にして、これを忠信といふ。誠と忠信と、その間あるは、天然と人爲とによればなり。その至るに及んでは一なり。本邦にて、惟神の道といふは、乃ち、天道の誠をいふ。隨神の道といふは、乃ち、人道の忠信をいふ。苟も、天道の誠に至らんと欲せ



ば、人道の忠信より従事せざるべからず。曾子忠信の説、その要を得たりといふべし。

臣、嘗て、淺見綱齋の説を聞きて、感服したることあり。その説にいはいはく、忠は、心の實ありて、義を盡すをいふ。今井兼平、その主木曾義仲に仕へて、始終變ぜず、その主の最期を見て、馬より落ち、刀に貫かれて死せしは、その節烈なり。されど、その主の、院の御所を焚きたる暴舉を諫止すること能はず、その主をして、不臣の罪を被らしめしは、忠にあらずと。忠の意義において、盡せりといふべし。古來、その主の爲に、身を致し、心を盡して、義を誤りし者、尠からず。これ皆、忠の本意明晰ならざればなり。信も、亦、言行違はざるのみを以て、信とする時は、

淺見綱齋  
近江の人。名は安正、綱齋はその號（二二二二年―二二二三年）  
今井兼平  
四郎と稱す。  
木曾の四天王の隨一（一八一二年―一八四四年）

昭烈  
蜀漢の天子。  
姓は劉、名は備、字は玄徳、昭烈はその諡號（二〇〇年―一八二年）

漢の高祖も、鴻溝の境を出でず、後漢の昭烈も、蜀を取らず、前漢の創業も、三分の中興も行はれずして、帝王の大業は、匹夫と同業とならんのみ。これ、己を盡すも、義に適するを貴び、實を以てするも、道に違はざるを、必要とする所以なり。

今、曾子の三省する所を以て、これをおのれに體し、人君となりては、わが民の

明治十四年辛巳六月

一等侍講五位臣元田永字謹撰并書



爲に、慈養生息、その所を得んことを慮るや、或は忠ならざるか、天下に施すところの敕諭命令、或



は、政事法律の表裏支吾ありて、或は信を失はんか、先王の成憲、前哲の遺訓を傳誦して、或は習熟せざるかと省み給ふ。人臣となりても、亦、各省る所あり。かくの如く、君臣共に、日日躬親ら省察力行せば、則ち、何ぞ、國家生民の治安ならざることあらんや。何ぞ、聖帝賢臣たらざるを患へんや。臣、素より、陛下の省察力行、祖宗の聖帝明王に愧ぢ給はずして、曾子の自修に明察する所あらせ給ふを信ず。嘗て、後宮に侍して、これを聞けり、

いにしへの文見るたびに、思ふかな、

おのが治むる國はいかにと。

聖躬の深く、躬ら省み給ふこと、かくの如し。苟も、この聖心を

三代  
夏殷周。

孔明

諸葛亮の字。  
蜀漢の名相。  
(八四一年—  
八九四年)

姜后

齊侯の女。宣  
王朝政を忘  
る、后自ら罪  
して、簪珥を脱  
して命を待  
つ。宣王悟り  
て政に勤む。

存養擴充し給はば、唐虞三代も、これに超ゆることなからん。

臥す龍の岡のまら雪、ふみわけて、

草のいほりを、訪ふ人やたれ。

と詠じ給ふに至つては、劉備の、孔明を求めし心の切なるを希望し給うて、聖躬、賢を求むる誠を以て、親ら、劉備に比し給ふ御心、言外に藹然たり。又、周の姜后、宣王を諫むる題を賜ひしに、皇后陛下の詠進し給ひしは、

身をつみて、飾りし花を、散らさずば、

朝日のかげも、勻はざらまし。

又、正心の御題に、

かへりみて、心に問はば、見ゆべきを、

孔明  
姜后



ただしき道に、なに惑ふらん。

兩陛下、關關和樂の中に、相いましめ、相懋<sup>モウ</sup>め給ふ聖心、歌詠のおもてに溢れて、省察力行の實、天地も感動すべし。これを拜誦する者、誰か、感泣奮勵して、亦、自ら猛省せざらんや。臣、この章を講ずるにおいて、たまたま感ずる所あり。故に、叨<sup>トウ</sup>に、德旨を摘發<sup>トクハツ</sup>すること、かくの如し。庶幾<sup>シロカ</sup>はくは、宏度<sup>コウド</sup>、これを聽納し給ひて、更に、ますます力勉あらせられんことを。元田永孚一經

進講録

二 今上天皇御製

○

つかさ人 ささぐるふみは 多かれど 花みるほどの ひまはありけり

○

としどしに 想ひやれども やまみづを 汲みて遊ばむ 夏なかりけり

○

園もりや ひとり見るらむ むかしわが あつめし庭の あき草の花

○

まづが屋の 軒端にたかく つみあげし 新藁しるく 霜ふりにけり

ウキトケル  
取寄詞



あさみどり 澄みわたりたる おほ空の ひろきを  
おのが 心ともがな

積りては はらふがかたく なりぬべし ちりばか  
りなる 事と思へど

○ 考 ころある 人のいさめの 言の葉は 病なき身の  
薬なりけり

○ 親 たらちねの 庭のをしへは せばけれど ひろき世

にたつ もとゐとはなれ

○ よもの海 みなはらからと 思ふ世に などなみ風  
の 立ちさわぐらむ

靖國神社へ行幸ましまして  
神がきに なみだたむけて 拜むらし 歸るをまち  
し おやも妻子も

社頭祈世

とこしへに 民やすかれと いのるなる わが世を  
まもれ 伊勢の大神



三 花の譜

一、梅

梅は、野にありても、山にありても、小川のほとりに在りても、荒磯の隈にありても、管に、その花の美しく、香の清きのみならず、あたりのさまをさへ、ゆかしき方に見するものなり。崩れたる土塀、歪みたる衡門、あるは、掌のくぼほどの瘠畑、形ばかりなる小社などの、常は、眼にいぶせく、心に飽かぬものも、この花の一木、二木立ちまじりて、咲き出でなんには、をかしきものとぞ眺めらるる。たとへば、徳高く、心清き人の、如何なる處にありても、その居る處の俗には移されずして、却りて、その俗を易ふるが如し。出師の表を讀みて、涙を墮さぬ人

出師の表  
諸葛亮の、蜀

の後主に上れるもの、前後二表あり。安子順いふ、出師の表を讀みて、泣かざるものは、人にあらずと。

は、なほ、友とすべし。この花好まざらん男は、奴とするにも堪へざらん。

二、雪 團

雪團は、紫陽花に似て、心多からず。初は、淡く、色あれど、やがては、雪と潔くなりて終る。たとへば、聊か、氣質の偏りたる人の、年を積み、道に進みて、心さま純く正しくなれるが如し。遠く望むも好し。近く視るも好し。花とのみいはんや、師とすべきなり。

三、芙 蕖

芙蕖は、花の中の王ともいふべくや。おのづから具れる位高く、徳秀でたり。香は、遠くわたれど、巖桂、瑞香、薔薇などのや



うに、さし通りたる如き趣なく、色は勝れて麗しけれど、海棠、牡丹、芍薬などのやうに、媚き立てる方にはあらず。人の見るを許して、狎るるを許さざる風情、また儔なく、尊し。曉の星の光の薄るる頃、靄立ち罩むる中に開く音する、それと、姿を見ざるうちより、はや、人をしてあこがれしむ。雲の峯、忽ち崩れて、風ざわざわと、高き樹に騒ぎ、空黒くなるやがて、夕立雨の、一しきり降り來るに、早くも、花を閉ぢたる賢さ、大智の人の、機に先立ちて、身を取り置き、變に臨みて、悠悠たるにも似たり。ちり際も、荅の時も好く、散りての後、一ひら、二ひら、漣に、身を任せて、動くとも、動かぬともなく、水に浮べるも面白し。花ばかりかは、葉の浮きたる、卷きたる、開き張りたる、破れ裂

けたる、枯び果てたる、皆好し。茄の、緑なせる時、赭く黒める時、いづれ好からぬは無く、蜂の巢なせるものも、見て、趣なからず。この花の、涼しげに咲き出でたるに、長く打ち對ひ居れば、わが、花を觀る心地はせて、わが、花に觀らるる心地し、顧みて、さまざまの汚を帯びたるわが身の、かひなく、口惜しきを覺ゆ。この花を愛づるに堪ふべき人、そも、人の世に、いくたりかあらん。

四、 朴

朴は、山深きあたりの、高き梢に、塵寰のけがれ、知らず顔して、ただ、青雲を見て、嘯き立てる氣高き、比べん方なし。香は、天つ風の、烈しく吹くにも壓されず、色は、白壁を削りたればと



武帝  
前漢五代の天子、雄才大略ありて、大に領土を擴張せり。(五〇四年—五七四年)

て、かくはあらじと思はるるまで潔きがなかに、猶暖げなる趣さへあり。瓣は一重なれど、思ひ切りて、大きく咲きたる、なかなかに、八重なる花の大いなるより、めざまし。心のさまも、世の常ありふれたるものとは差ひて、仙女の冠などにも爲さば爲すべき花の面影、かうがうしく、貴し。この花を、瓶にせんは、ただ人の堪ふべきにあらず。まづは、漢にて武帝、わが邦にて太閤などこそ、これを、瓶中の物となし得べき人なれ。

五、瞿 麥

瞿麥は、野のもの勝れたり。草多く茂れるが中に、この花の咲きたる、或は、水乾きたる河原などに咲きたる、道行く者をして、優しの花やと獨言たしむ。馬飼ふべき料にとて、賤の子

が刈りて歸る草の中に、この花の、二つ三つ見えたるなど、誰か、歌心を起さざるべき。(幸田成行—譯言)

四 振天府拜觀の記

明治三十一年十月十八日のことなりき。宮城内に、過ぎし二十七年、八年役の戦利品を藏めたまへる御府庫のあるに、参りて拜觀すべき旨、御許を蒙りぬ。

當日午後二時、召されし人人、宮内省中會議所に集りて、しばし待ちける程に、田中宮内大臣出で來られ、左の趣旨を演説せられたり。本日、拜觀をさし許されし戦利品の儀は、親王殿下を始め奉り、諸將校、士卒の團體等より献上ありし品品

二十七年、八年役  
清國との戦役。明治二十七年九月和破れ、同二十八年四月和成る。  
田中宮内大臣  
名は光顯。



を、一の御府庫に聚めて、且は、諸將士が、當時、苦戰の状をおぼしやり、且は、後日の記念にもとの、かしこき叡慮より發せられて、近侍の臣、即ち、本大臣、侍從武官長など、兩三輩こそ、たまたま、その御經營を承りたることもあれ、他の臣下には、曾て、謀らせ給ふ所あらせられず、始より終まで、大御心を注がせられ、深き御意匠を以て、それぞれの結構、裝飾等をも定めさせ給ひしなり。されば、數の貨を積みたりとて、再び得がたき品品なるは、申すも更なり。架上の裝置にいたるまで、宸襟を竭し給ひたるなれば、金玉の燦爛たるこそなければ、いたらぬ限なき御光を添へさせ給へる寶庫にして、東京の正倉院とも稱し奉るべきものなり。中にも、かしこく、忝きは、戰病死將

正倉院

奈良市東大寺  
境内にあり。  
奈良時代の御  
物を藏す。

校の眞影、士卒の姓名に至るまで、扁額にしつらひ、卷物に裝ひて、疎ならず保存したまひ、屢親臨し給ひて、その時の状を想ひやり給ひ、その人の心をしのび給ふこと、御側より見奉る臣等、いかでか、感涙に咽ばざるべき。今日、諸臣に、拜觀を許されしこと、誰聞え上げて、勧め參らせたるにもあらず。猶、皆厚き大御心より出でたる忝さを、人人思ひ奉れかし」と、いと懇に説き諭されたり。

それより、導かれて、御府庫の方へ參りぬ。御府庫は、吹上御門を入りて、字三角矢來と申す處に建て設け給へり。振天府と名づけ給ふと承る。總體白木造にて、いとかうがうしく、物清げなり。階を登りて、その内に入れば、岡澤侍從武官長、こま

岡澤侍從武  
官長  
名は精。



かに案内説明せられぬ。各種の榴弾を始め、朝鮮、清國、臺灣等の武器兵具、處せく、數も知られねば、一一記憶もならず。唯唯、目にあたる物ごとに、幾多の軍人の、當時の艱苦と、兵器の、いよいよ銳利になり行くを思ふのみなりき。

およそ一時間餘にして、ここを出て、砌下に沿うて、右に廻れば、一の四阿やうの亭たてり。そのさま、世の常ならず。巨材を柱とし、太き鑢をかけて、勾欄に代へ、石崖の斷片にやと覺しき大きなるを、据ゑも、重ねもして構へられたる、まづ珍しく、故ありげなり。岡澤侍從武官長の語るやう、「この柱は、威海衛に設けられたる防材を斷ち切りたるにて、太き鑢は、それを繋ぎたるもの、巨石は、即ち、各處砲臺を固めたる石崖の破

威海衛  
清國山東省  
登州府、清國  
北洋水師の根  
據地なりき。

壊せられしを採り集めて、ものし給へるなり。これは、た、御意匠によりて成れるにて、有光亭の名をさへ選ばせ給へり」と承るも、尊き御事どもなり。

この處は、宮城中、やや高き岡にて、近くは、櫻田、霞が關、遠くは、竹柴が浦のあたりまでも見はらし、仰げば、老松、綠榮えて、梢を拂ふ風も、千歳の聲を立て、見下せば、千尋の濠、水澄みて、鯉、鮒のたぐひさへ、御惠の波をかづきつつぞ遊び居る。この前後の道には、野砲、山砲、碇の類、陸に、海に捕獲したる物ども置かれたれど、能くはえ覺え侍らず。それより、また、西に向ひて行くに、振天府にならびたる、一棟の御庫あり。これなん、かの、戦病死者の眞影、名簿を具へおかるる處なる。内に入りて、



故有栖川宮  
織仁親王(二  
四九五年—二  
五五五年)

まづ仰がるるは、故有栖川宮、故北白川宮兩殿下の御眞影なり。拜み奉れば、唯、目もくれ、胸塞りて、堪へ難きに、左右の長押に掲げられたる、將校たちが生前の姿、病苦の體、とりどりあざやかに見えたるぞ、いたましき。この扁額は、廢銃の框を以て、その縁を飾られたり。かかる事にまで、御意を用ゐたまへりと承るも、かしこしや。兩殿下の御影の下に、白木造なる、五重の御棚あり。第一の棚の上に、卷物一軸おかれたり。目もあやなる袱紗うち敷きて、日本錦の表装せるに、兩殿下の御名を記しおき給へるは、その遺烈を、萬世に傳へんの叡慮なるべし。第二の棚以下、つぎつぎに、陸海軍の將校より、士卒の末に至るまで、それぞれに、卷を分ち、棚を別にして、装置せらる。

草むす屍  
萬葉集大伴家  
持の長歌に、  
「海ゆかば、水  
づく屍、山ゆ  
かば、草むす  
かばれ、大君  
の、へにこそ  
死なめ、云云。」

「繙きて見奉りね」と、侍從武官長の勸むるままに、恐る惶る、下なる一卷を繰りひろげ見れば、歩卒の名ども、一一に記させ給へり。かかる末末まで、漏らさせ給はぬを思ひ奉るにも、涙ぞ落つる。巻き返し見れば、草色の絹して表装せられたり。草むす屍をおぼしやり給へるならんと推し量り奉るも、忝し。ここにも、猶、戦利器のかず多かりしかども、かの御眞影と、連名の卷物とに目留り、心惹かれて、大かた、よくも拜觀しかねつれば、定めて、ひが言も多からん。  
そもそも、二十七八年の戦役は、開闢以來の大御業にして、遂に、比類なき大捷を得て、皇國の威光を、海外に輝したるは、諸軍士が忠勇なるによるとは申しながら、かけまくも畏き



栴風沐雨  
唐書に、「文皇帝、栴風沐雨、以定天下。」

大元帥陛下の、遠く、大本營を、廣嶋に進められ、栴風沐雨に異らぬ御勞をも厭はせられず、親しく、軍務を謀らせ給ひ、御みづから率先奮勵し給へばこそ、臣民、御稜威の風を仰ぎて、身を捨て、家を忘れ、義勇奉公をも全くしつるなれ。然るを、ひたすら、軍隊の績に歸し給ひ、功を賞し、勳に報い、剩へ、撃ちあふ砲の煙と消えし士卒の末に至るまで、青人草の一本と憐ませ給ひてぞ、かく、御垣の内に、その名をとどめ給ひけん。これを傳へ承らん、かの遺族眷屬は、申すも更なり、一般臣民は、おのが同胞の、死して、餘榮あるを歡喜せざるはあらじかし。いかで、この事、言ひ繼ぎ、語り傳へて、忝き大御心を、洽く、庶人に知らせばやと思ひ奉るになん。あはれ、人、うまれて、男子たら

ば、軍人になれ、かし、同じ死ぬるものならば、外國の兵と戦ひて死ねかし。たとひ、身は、戦場の露と消ゆとも、朽ちせぬ名をば、雲居に揚げんこそ、臣民たる者の本意なるべけれど、感激の涙を、硯にそそぎて、謹み畏みて記しぬ。(關根正直)

### 五 聖駕の凱旋を賀し奉る

學習院長公爵臣近衛篤麿、院の職員九十三人に代りて、謹みて奏す。

天皇陛下、允文允武の資を以て、夙に、列聖の洪緒を續ぎ、大いに、中興の偉業を建てさせ給ひ、群品、おのおの、時雨の化に霑ひ、萬民、皆、天日の光を仰ぐ。嚮に、韓廷、政を失ふに當り、清國、

近衛篤麿

(二五二三年  
一、二五六四年)

時雨の化

孟子に、「君子之所、以教、者五、有、如、三時雨化、之、有、上。」



討清の軍  
明治二十七年  
八年戰役

忽ち、盟を渝へ、屬邦の拯難を名として、東洋の平和を破りしかば、陛下震怒して、遂に、討清の軍を起させられ、大本營を、廣嶋に進めたまひ、供御を損じ、飲膳を減じ、宵衣旰食、親しく、陸海の軍事を統べさせ給へり。

されば、百僚有司の、事に與れるもの、兩院議員の、議に參するもの、將士夫卒の、軍に従へるもの、皆陛下の大御心を心として、奔走經營、以て、皇謨を贊襄し奉らんことを期せざるはなし、これを以て、皇軍の海を渡りて進みしより、いまだ、一歳に満たざるに、奉天、山東を占領し、臺灣、澎湖を震動し、降る者は納れ、懷く者は撫して、恩威並び行はれしかば、旭旗の向ふ所は、草木、皆靡き、天兵の至る所は、鷄犬も驚くことなかりき。

三韓を服して  
神功皇后の征韓をいふ。  
肅慎を平げ  
齊明天皇の御代に、阿部比羅夫の、これを征せしむる。

清廷ここに、渝盟を悔い、地を獻じ、幣を納れ、遂に、媾和の條約を訂して、善鄰の舊誼を復するに至れり。日出づる所の國、版圖、益廣りて、光華、六合に遍く、現御神の君、明德、愈遠くして、威稜、五洲の外に振ふ。伏して惟るに、伊弉諾尊、伊弉册尊、天の瓊矛を執りて、大八洲國を畫き成し給ひ、天祖、天照大神、寶劍を傳へて、天つ日嗣の神璽となし給ひしより、列聖相承けて、益國威を張り、或は、三韓を服して、藩となし、或は、肅慎を平げて、貢を徴し給ひ、細矛千足の名、夙に、四方に著れたりといへども、天業の恢弘せる、今日の如きは、千古に亘りて、いまだ有らざる所なり。この盛時に遭ひまつれる臣民、いかでか、進みて、報效を圖らざるべき。



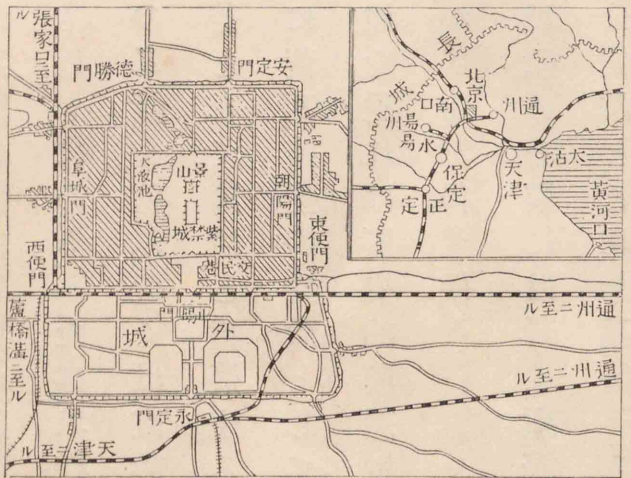
臣等、職を學習院に奉じ、養ふ所は華胄の子弟、皇家の藩屏なり。教ふる所は、忠孝の道義、文武の學藝なり。今より後、愈益平生の丹誠を竭し、以て陛下の盛徳大業に副ひ奉らんことを希ふ。今や、聖駕の還幸に際して、歡喜の至に勝へず。謹みて、表を捧げて、以聞す。(萩野由之)

### 六 北京の光景を報ず

北京の北九十五清里、南口と申す小驛より、一書拜呈仕り候。天津より、北京に著したるは、六月十九日の夕にし、て、それより、只今まで、何等の消息も致さず候ひしは、畢竟、餘に、書くべきこと多くして、何から申してよきやら、

清里  
一清里は、我が、約五町五十一間にあたると。  
天津  
直隸省白河の岸にあり。

高麗征伐  
貞觀十八年。  
(一二〇四年)



殆ど、みづから迷ひたると、且は、見聞に、餘に多忙なりしが爲とに候。然るに、昨日、北京を發し、長城見物に出掛候處、本日は、宿次の都合にて、午後二時過に著し、意外にも、數時を贏け得候間、一寸申し進じ候。一口に、北京と申せば、支那の帝都に外ならず候へども、遼、金、元、明の故都にして、更に溯れば、隋時の舊蹟もあり。唐の太宗も、高麗征伐の



風蕭々兮  
燕の荆軻の  
作。その次句  
は「壯士一去  
兮不復還」。

無垠  
楚辭に、「其大  
無垠」。

時には、この地を經由したりし痕迹あり。更に遠く溯れば、燕國の都にして、風蕭蕭兮、易水寒を謠ひたりし易水も、近きにあり。一たび、城壁のうへに登り、遙に、西山一抹の翠黛を望み、近くは、直隸の大平原に、珍しくも、萬樹蒼蒼として、萬戸と相接する北京街區を瞰、更に、その中心に、黄瓦、綠甍の、堂堂として聳え、整整として聯れる紫禁城を見れば、歴史的聯想は、われを驅りて、無垠の域に導かざるを得ず候。

たる爲か、はた、未然の事變を慮りたる爲かは知らねど、何となく穩ならぬ心地致し候。予は、北京の皮相を見たるまでなれども、北京即今の情態は、この儘にて、永遠に持續すべきものにあらざるが如く感じ候。それも、只、かく感じたるのみ、別に、何等の深き理由もこれなく候。匆匆不一。(徳富猪一郎―七十八日遊記)

### 七 宇治河の先陣 その一

折節、關東にはと披露しけるは、院は、去年十一月一日、西國へ、御門出と聞えたり。これは、木曾義仲都にて、狼藉斜ならず、人民牢籠して、貴賤、やすきことなし。平家は、官位高く、太政大

院  
後白河院。  
去年  
壽永二年。



兵衛佐源賴朝。

逆鱗 天子の憤りや給ふにいふ。韓非子に「龍之爲蟲也柔則可狎而騎也、然其喉下有逆鱗徑尺、若人有嬰之者、則必殺之、人主亦有「逆鱗」。

臣、左右の大將にあがり、顯官顯職して、卿相雲客に列りきただ奢れるばかりにこそありしかども、さすが君臣上下の誼を箴し、禮節仁義の法を篤うせりき。無下に交代おとりしたる源氏なりけり。舊臣ゆかしとて、思し召し立つとぞ聞えける。兵衛佐、大いに驚き給へり。木曾と平家と、一つになり、九國、四國、南海、西海、與力同心せば、天下を鎮めむこと容易かるべからず。まづ、義仲を追討して、逆鱗をやすめ奉り、その後、平家を亡すべしとて、六萬餘騎をさしのぼす。鎌倉殿の侍所にて評定あり。合戦の習、敵に向ひ、城を落すは、案の内なり。大河を、前にあてたる兵を落さむこと、ゆゆしき大事なり。都に近き、近江國には勢多橋、その流の末に、山城國には宇治橋、二つの

梶原源太景季 時に年二十三〇(一八二二年)一八六〇年)

難處あり。定めて、橋は引きぬらむ。河は深くして、流あらし。なべての馬の渡すべき河にあらず。その上、河中に、亂杙、逆茂木打ち、水の底に、大綱張り流しかけぬらむ。良馬どもを、支度して、宇治、勢多を渡して、高名あるべしとぞ議せられける。かかりければ、大名小名、黨も、高家も、面面に、その用意あり。このうち、佐佐木、梶原、馬に、事をぞ鬪きたりける。兵衛佐殿には、折節、祕藏の御馬、三匹あり、生噉、磨墨、若白毛とぞ申しける。梶原源太景季、佐殿の御前に参りて、君も、御存知ある御事に候へども、弓矢とる身の、敵に向ふ習は、よき馬に過ぎたることなし。健馬に騎りぬれば、大河をも渡し、巖石をも落し、かくるも、引くも、たやすかるべし。力は、いかに強くとも、心は、い



七人

頼朝、および  
田代信綱、新  
開忠氏、土屋  
宗遠、土佐坊  
昌俊、土肥實  
平、岡崎義實、  
梶原に

景季の父景  
時。

蒲冠者  
範頼(一八  
五三年)

かに猛くとも、騎りたる馬弱ければ、自然の犬死をもし、なが  
き恥をも見ることに侍り。されば、生暖を下し預りて、今度、宇  
治河の先陣を勤めて、木曾殿を傾け奉り候はばや」と、傍若無  
人に、憚るところなく申したり。佐殿、やや案じ給ひけるは、「わ  
れ、土肥の杉山に、七人隠れ居たりしに、梶原に助けられて、今  
世に出づる事も、忘れがたく思ふなり。賜ばばや」と覺しける  
が、また案じて、蒲冠者も、人してこそ、所望申しつれ、景季が、推  
參の所望、頗る狼藉なり。また、これほどの大事に、馬に、事闕け  
たりと申すを、たばでも、いがあるべき」と、かく案じて、宣  
ひけるは、「景季、たしかに承れ。この馬をば、大名小名、八箇國の  
者ども、内外につけて、所望ありき。就中、大將軍にさし遣す蒲

辰

子(午後十二  
時)丑(午前二  
時)寅(同四  
時)卯(同六  
時)辰(同八  
時)巳(同十  
時)午(同十二  
時)未(午後二  
時)申(同四  
時)酉(同六  
時)戌(同八  
時)亥(同十  
時)  
佐佐木四郎  
高綱  
秀義の子、  
時に年三十二  
三。

冠者、眞平にまかり預らむといひき。然れども、源平の合戦、い  
まだ落居せず。木曾追討のため、東國の軍兵、大概上洛す。知ら  
ず、平家と木曾と、一つになりて、大いなる騒となりなば、頼朝  
もうち上らむ。その時の料にと思ひて、誰誰にも賜ばざりき。  
これは、生暖にも相劣らず」とて、磨墨を賜びにけり。

明日の辰の始に、近江國の住人佐佐木四郎高綱、佐殿の館  
に早參して、所存ある體と覺えたり。兵衛佐宣ひけるは、「いか  
に、御邊は、この間は、近江に在國と聞けば、志あらば、軍兵上洛  
に附きて、京へぞ上り給はむ。ずらむと相存ずるに、いつ下向  
ぞ」と問ひ給ふ。高綱申しけるは、「その事に侍り。去年十月の頃  
より、江州佐佐木莊に居住のところにかかる騒動を承れば、



佐佐木莊  
近江國蒲生郡

誠に、近きにつきて、京へこそ打ち上るべきに、軍の習命を、君にたてまつりて、戦場に出づることなれば、再び歸參すべしと存すべきにあらず。今一度、見參にも入り、御暇をも申さむため、又、いづくの討手に向へとも、たしかの仰をも蒙らむ料に、正月五日の卯刻に、佐佐木の館を打ち出で、三箇日の程に、鎌倉に下著し侍りき。且は、下向せずして、自由の京のほりも、その恐ありと存じ、かたがたの所存によりて、まかり下れり。志は、かやうに運びたれども、一匹持ち侍りたる馬は、馳せ損じぬ。親しき者といひ、知音と申す人人、面面に打ち立つ間、誰に、馬一匹をも尋ね乞ふべしとも、覚えねば、いかが仕り侍るべきと心勞して、大名小名、既に上りぬれども、今までは、かく

大庭三郎  
名は景親、相模の人、八一八四〇年  
殿原兄弟  
定綱高綱等

て候ふなり」と申す。兵衛佐殿は聞きあへず、下向、今に始めざる志、神妙神妙。そもそも、木曾朝威を輕んじ奉るによりて、討のために、軍兵をさし上す。宇治、勢多の橋、定めて引きて侍らむ。宇治河の先陣渡されなむや」とありければ、高綱申しけるは、「近江の生立の者にて候へば、間近き宇治河、深さ、浅さ、淵瀬までも、委しく存知仕つて候ふ。かの手に向ひ候はば、宇治河の先陣は高綱と申す。佐殿は、去ぬる治承四年八月下旬の頃、石橋の合戦に、大庭三郎に追ひ落され、遁れ難かりしに、殿原兄弟返りあはせて、禦矢射て、頼朝が命を助けられき。その時は、日本半分とこそ思ひしかども、世、いまだ落居せず、さしたる事なし。相構へて、今度、宇治河の先陣勤めて、高名し給へ。



必ず相計ふべきなり。頼朝、隨分祕藏の生暖、御邊に預け奉ると、直に、仰を蒙る。高綱は、今生の大御恩、希代の面目、家門の勝事、何事か、これに如くべきと思ひければ、畏り入りて、馬を賜りて、出でむとするところに、佐殿宣ひけるは、「この馬所望の人、あまたありつる中に、舍弟蒲冠者も申しき。殊に、梶原源太直參して、眞平に申しつれども、もしもの事あらば、騎りて出でむずればとて、賜ばざりき。その旨を存ぜられよ」と仰せければ、高綱聊もそぞろかず、座席になほりて畏り、「宇治河の先陣、勿論に候ふ。高綱、もし、軍以前に死すと聞し召さば、先陣は、はや、人に渡されけりと思し召さるべし。軍場にて存命と聞し召さば、宇治河の先陣、高綱渡しけりと思し召されよ。もし、

他人に、先をかけられて、本意を遂げずば、敵は嫌ふまじ、河端にても、河中にても、引き組んで落し、勝負を決すべし」と申し定めて、出でにけり。

### 八 宇治河の先陣 その二

元暦元年正月二十日、大手搦手、宇治勢多に著く。九郎義經、河端に推し寄せ、見給へば、橋板を破り取りて、向の岸に、垣楯に搔き、櫓に構へたり。水は、深さ増して、底見えぬ。その上、亂杙、逆茂木、隙なく打ちて、大綱、小綱、引き張りて、流し懸けたれば、鶯鴨などの水鳥も、たやすく潜り通るべしとも見えざりけり。河の耳、分内狭くして、打ち臨みたるもの、四五千騎には過



御曹子  
義経、時に年  
二十六。

ぎず。二萬餘騎は寄り附くべきところなくして、ただ徒に、後陣に控へたり。河のさまをも見ず、橋を引きたるも知らぬもののみ多ければ、渡るべき評定にも及ばざりけり。御曹子は、雑色歩走の者どもを集めて、家家の資財雑具一一取りいださせて、河端の在家を、悉く焼き拂ひ、大勢を、一所に集むべし」と下知し給ふ。このよし、走せ散りて、のしりけれども、かねて、山林に逃げ隠れたりければ、家家には、人もなし。この上はと、手に手に、續松を指し上げて、宇治の在家を焼き拂ふ。行歩にかなはぬ老者少者ども、さりととも忍び居たりけれども、猛火に焼け死に、たまたま遁れ出でたれども、馬人に踏み殺さる。まして、牛馬の類は、助くる者もなければ、その數を知ら

ず。焼け死にけり。風吹けば、木安からず」とは、かやうの事なるべし。廣廣と焼き拂ひたりければ、二萬五千餘騎のこる者もなく、河の耳に打ち臨みたり。

御曹子、河の邊近く、高櫓を造らせて、この上に登りて、四方を下知し給ひけり。矢立の硯を取り寄せて、宇治河先陣と剛の者とを、次第、明明に注して、鎌倉殿の見參に入るべし」と仰せられければ、軍兵各、勇をなして、忠を抽でむとぞ色めきける。御曹子は、櫓の上にて、さまざまの事下知し給ひけれども、大勢思ひ思ひにとどめきければ、うち紛れて、聞えざりければ、平等院の御堂より、太鼓を取り寄せ、櫓の上にて、打ちければ、大勢静りて、何事やらむと、鳴をしづめて、軍將に、目をかく







畠山重忠  
時に年廿一。

比良の高嶺  
近江國滋賀郡  
にあり。

綱、澀谷右馬允重助、熊谷次郎直實、子息直家、已上五人ぞ、續きて渡しける。矢ごろも近くなりければ、向の岸の軍兵、弓を強く挽かむがために、わざと、兜を脱ぎて、思ひ思ひに、ひき取り、ひき取り發ちける矢、雨の脚の如くに飛びきたりけれども、甲冑をゆりあはせ、ゆりあはせ、矢間をたばひて、振舞へば、鎧は、重代の重寶なり、裏缺く矢こそなかりけれ。

されども、いまだ、河を渡すものはなし。いかがあるべきと、評定さまざまなりけるに、畠山庄司次郎重忠進み出でて、申しけるは、事新し。この河は、近江の湖の末、今、始めて出てきたる河にあらず。春立つ日影の習にて、細谷川の氷解け、比良の高嶺の雪消えて、水のかさは増すとも、水の減ることあるべ

高倉宮云云  
治承四年五月、源賴政、以仁王(高倉宮)を奉じて平氏を討つ。

からず、足利又太郎忠綱も、高倉宮の御軍の御時は、渡せばこそ渡しけめ。鎌倉殿の御前にて、さしも、評定のありしは、これぞかし。始めて驚くべき事にあらず。かねての馬の用意、その事なり。重忠渡して、見參に入れむといふところに、平等院の小嶋が崎より、武者二騎驅け出でたり。梶原源太と佐佐木四郎となり。景季が装束には、木蘭地の直垂に、黒革威の鎧に、三枚兜の緒をしめ、滋籐の弓の中を把り、二十四さしたる小中黒の矢負ひ、鍊鐔の太刀佩いて、鎌倉殿の賜びたる、磨墨といふ名馬に、黒塗の鞍置きて、騎つたり。高綱は、褐の直垂に、小櫻を、黄に反したる鎧に、鉞形打つたる兜に、笛籐の弓の真中を把り、二十四さしたる石打の征矢、頭高に負ひ、噴物造の太刀



佩いて、これも、鎌倉殿より賜びたる生唆に、黄覆輪の鞍置き  
てぞ騎つたりける。誰か先陣と見るところに、源太、さつと打  
ち入りて、遙に先立ちけり。高綱いひけるは、いかに源太殿御  
邊と高綱との外に、人なければ、かく申す。殿の馬の腹はら帯びは、以  
ての外にゆるびて見ゆるものかな。この河は、大事の渡なり。  
河中にて、鞍踏み反して、敵に笑はれ給ふなといひければ、さ  
もあらむと思ひて、馬を留め、鐙踏ん張り、立ち上り、弓の弦を、  
口にくはへ、腹帯を解きて、引き詰め、引き詰めしめける間に、  
高綱、さつと打ち渡して、二段ばかり先立ちたり。源太たばか  
られけりと、安からず思ひて、これも打ち浸して渡りけるが、  
馬の足、綱にかかりて、思ふやうにも渡されず。高綱は、究竟の

逸物に騎つたれば、宇治河早しと雖も、淵瀬をいはず、さざめ  
かして、曲まがに渡し、向の岸近くなりて、生唆、綱に懸りて、足を、さ  
と歩み除けければ、もとより期するところとて、太刀を抜き、  
大綱小綱三筋、さと切り流し、向の岸へ打ち上り、鐙踏ん張り、  
弓杖突いて、佐佐木四郎高綱、宇治河の先陣渡したりや」と名  
告りも果てぬに、梶原源太も、流渡に上りにけり。(源平盛衰記)

## 九 平家雜感

### 一、都落

およそ、世に傳へ遺されたる歴史は多かれど、平家の都落  
ばかり、哀にも、また、めざましきはなかるべし。南都の餘燼、い

平家の都落  
壽永二年七  
月。  
南都の餘燼  
治承四年二月  
平重衡、奈良  
法師を攻め  
て、その寺を  
焼く。



墨股の勝鬨  
養和元年三月  
平知盛等、源  
氏を美濃の墨  
股川に破る。

木曾云云

養和二年七月  
義仲、叡山に  
據る。

み吉野の云

云

古今集、詠者  
不詳、「み吉野  
の山のあな  
たに宿もがな  
世のうき時の  
かくれがにせ  
む」。

一炬の煙

杜牧の阿房宮  
賦に「楚人一  
炬、可憐焦  
土」。

まださめず、墨股の勝鬨、なほ響きぬるに、信越、俄に、雲亂れて、  
木曾の五萬騎は、や、比叡のあなたに、充ち満ちぬ。宇治淀の備  
もろくも潰えて、都も、今を限とぞ見えし。あはれ、一門の天下、  
身を置くに、處なし。世は、かく憂きを、み吉野の山のあなたに  
も、かくれがは無きか。いざさらばやみなん。都の中にて、いか  
にも。ならんよりは、西國の行幸に御供して、一旦の凌辱を忍  
ばまし。あはれ、生死も知らぬこの別路、再び歸り來べき都な  
らねばとて、六波羅、池殿、西八條以下、一門譜第の邸宅宿房、京  
白川の四五萬家を併せて、一炬の煙となし果てぬることあ  
わただしかりしか。

ここに、鳳闕の礎、空しく残り、椒房の嵐、夜夜かなしむ。保元

燒野の原云

平經盛の歌  
に、「故郷を燒  
野の原とかへ  
り見て末も煙  
の波路をぞゆ  
く」。

笛吹く人云

壽永二年十月  
平清經、月夜  
に笛を弄し  
て、海に入る。

このかた、天下の榮華をつくしたる、花の都を、燒野の原と顧  
みて、末は、煙の浪、雲の浪、行方も知らずさすらふらん。直衣、束  
帶の身にも、今は、黒金の衣をつけたれど、詠歌の餘哀に、狂れ  
て、弓矢の譽を勵まん心ちせず。さても、棄て難き命や。今こそ  
はうき世なれ。さすがにしのばるる昔の様の、夢に入るをば  
いかにかせん。翠華搖搖として、西に向へば、秋風、到る處に、野  
に満てり。嗚呼、きのふは、東關のもとに、轡をならべて十萬餘  
騎、けふは、西海の波に、纜を解きて七千餘人、行方の空はわか  
ねども、身にしむ秋は、欺かれず。渚に寄する波の音、袂にやど  
る月の影、すべて、心を傷ましむるもののみなり。月の出でく  
る山のはを、あなたの空とや思ひけん、日暮、舳に立ちて、笛吹



く人あり。響は、遠く、煙波をかすめて、三軍、ひとしく、耳を敲つ。嗚呼、この時、この人の懐、果して如何。(高山林次郎—樗牛全集)

二、清盛入道

世にもあはれなるは、平家とぞいふめる。げに、この一門の盛衰を考ふるに、心も、詞も、及びがたきなり。

案ずれば、一旦の榮華に耽りて、百年の計を思はず。今や、秋の嵐の吹き荒ばんずる朝も、春の夜の夢、なほ臚にして、覺めての後は、さすがに、うき世と觀ずれども、先世後代、既に梭をかへたるを、いかにかすべき。今を、昔にかへさんすべもかた絲のよりくづれたる世こそ、かへすがへすも、是非なけれ。

一題の遺詠に云云

されば、風雅にかくれては、一題の遺詠に、今生の本懐を終

忠度をさす。己身の現在に云云。維盛をさす。

入道相國 平清盛をいふ。一七七八年—一八四一年

へ、恩愛にほだされては、己身の現在に、來世の果報をおもはず。あはれは、桐の一葉に散りそめて、世は、とこしへの秋とぞ見えにける。おもへば、あやしきまでに、あはれなりける運命かな。

さるにても、入道相國の生涯こそ、なかなかにおもしろかりけれ。

弓矢のいさをし、はや畢んぬ。朝家の權柄、今はた盛なり。一門、殿上にのほりて六十餘人、私封、全國にわたりて三十餘州、攝録の家は、名のみにて、四海の成敗、みな、ここに集れり。むかしは、殿上の交をだに嫌はれし人、今は、この人ならでは、人にあらじと唱へられ、三百の禿童は、路に往反すれども、京師の



京師の長吏  
云云

陳鴻の長恨歌傳、楊氏の勢力を斂したる條に「京師長吏、爲之側目」。

嚴嶋

安藝の嚴嶋神社、平氏の尊信せしところ。

城南の離宮  
に云云

治承三年、後白河法皇を、鳥羽殿に幽し奉る。

射山

貌姑射山の略。

長吏これが爲に、目をそばだつるばかりなり。されば、十善の帝王、かしくも、外戚の威におされ給ひて、八幡賀茂の御幸は、八重の潮路の嚴嶋とぞ觸れられける。なにかしの卿が、入る日をも招きかへさんずる勢と書かれしも、げにことわりと覺ゆ。

不敵なる入道は、私門の榮に飽き足らで、世に、人もなげにふるまはれけるこそゆゆしけれ。ここに、卿相雲客、流離の難に遇ふもの四十餘人、法皇の御身を以てすら、城南の離宮に、射山の嵐をしのばせ給ふ。中にも、重代の帝座、俄に動きて、愛宕の里のあはれをとどめけるこそ、なかなかにあさましかりしか。

重代の帝座  
云云

治承四年、福原に遷都す。

維盛

重盛の子。(一八二〇年)

兩山

叡山と奈良と。

咲きも残らず、散りも初めぬ櫻花、嵐なくとも、かくてやはやむべき。一朝、東關、急を傳へて、大將軍權亮少將維盛、赤地の錦の直垂に、萌黄匂の鎧著て、連錢蘆毛の馬に、金覆輪の鞍置かせたる容儀、帶佩こそ、あつばれ、平門隨一の貴公子と見えしかど、富士川の水鳥に、算を亂しし十萬餘騎は、徒に、長き世の笑をとどめたるに過ぎず。加ふるに、北土、俄に、雲亂れて、木曾の山氣、漸く、都に逼り、兩山の衆徒、また、既に、反覆の色をしめしぬ。平家の運命、日に、ますます急なり。  
トコ

時しも、入道は、病にかかりぬ。あはれ、病の牀のさびしきに、霜夜の鐘の響の、枕に沈む時、安藝守の昔より、太政入道の今に至るまで、六十四年の生涯を、靜に憶ひ出でたる時、しかし



保平  
保元、平治。

小松の内府  
内大臣平重  
盛、世に小松  
殿と稱す。(一  
七九八年—  
八三九年)

六慾  
眼耳鼻舌身意  
の六根の慾。

て、命の際の身ぞと觀じたる時、彼果して、如何の感慨をか催しけん。一代の榮華、身にあまりて、保平のいさをし、またいふに足らずと思はざりしか、おのれにつらかりし人人を、かくまでに惱ししことの、罪深かりきとは思はざりしか、幾度か、帝座を驚し奉りしはては、軍兵を擁して、法皇を幽閉しまゐらせしことの中にも、非道の所行なりしを思はざりしか、更に、小松の内府が、身命にかへて、乃父の罪業を救はんとせし、至孝の情に想ひ到りて、恩愛のきづななに、うたた、悔恨の心を動すことなかりしか、佛門に歸依して、入道と呼びなせる身の、今や、六慾煩惱の絆を離れんずる大事のきはに、今生の名利を棄てて、未來の淨樂を欣よろこ求もとする一念を發することなか

りしか。皆あらず、入道は、死に至るまで、その初心を翻すことなく、まさに、その生けるが如くにして、死せしなり。

今はの詞にいはく、兵衛佐頼朝が首を見ざりつること、かへすがへすも遺憾なれ。われ死したりとて、佛事きんじ養やうをもすべからず、堂塔をも建つべからず。いそぎ、討手を下し、かれが首を刎ねて、わが墓前に懸けよ。これぞ、われに對しての、今生後生の孝養にてはあらんずると。一念の執著しやくちやくに、必衰の運命を、ものともせず、三世の因果を、身にひくとも、なほ、怨敵に報いんことを必せり。その事の可否は、しばらく措き、とまれかくまれ、丈夫たる心の強きは感すべきなり。たとひ、四海の波を翻して、かれが頭にかくとも、なほ、この一我を、いかにとも



死して云云  
ローマのキケ  
ロ、その友ス  
キピオの死を  
弔していは  
く、「死せりと  
雖も猶生く  
と。」

すること能はざらん。六尺の眇軀、ここに至れば、天地の大にも比ぶべく、運命、われにおいて、浮塵にひとしからん。いはゆる、死して、しかして、生けるものといふべきか。(高山林次郎「楞牛全集」)

一〇 山時鳥

○

目には青葉、山ほととぎす、はつ鱈。

山口素堂

○

みづりみの、水まさりけり、さつき雨。

向井去來

○

大嶋蓼太

相國寺  
禪宗。京都五  
山の一、上京  
今出川にあ  
り。

五月雨や、ある夜ひそかに、松の月。

○

凡 兆

渡りかけて、藻の花のぞく、流かな。

○

上嶋鬼貫

ゆくみづや、竹に蟬なく、相國寺。

○

高井几董

やま寺や、縁のしたなる、苔清水。

○

炭 太 祇

橋落ちて、人岸にあり、なつの月。

○

榎本其角

夕立や、家をめぐりて、あひる鳴く。



長良川

稲葉郡にあり、鵜飼を以て名高し。

稲葉山

長良川の南にあり、風致に富む。

瀟湘の云云

瀟湘は、湖南省洞庭湖の南にあり。八景は、平沙落雁、遠浦歸帆、山市晴嵐、江天暮雪、洞庭秋月、瀟湘夜雨、煙寺晚鐘、漁村夕陽なり。

一一 十八樓の記

瀟湘

美濃の國、長良川に臨みて、水樓あり。あるじを、賀嶋氏といふ。稲葉山、後に高く、亂山、左右に重りて、近からず、遠からず。田中の寺は、杉の一むらにかくれて、岸にそふ。民家は、竹のかこみの緑も深し。瀑布、處處に引きはへて、右に、渡船浮ぶ。里人、行きかひしげく、漁村、軒を竝べて、綱を曳き、釣を垂るる。おのがさまざまも、ただ、この樓をもてなすに似たり。暮れがたき夏の日も忘るるばかり、入日の影も月にかはりて、波にむすほるる。篝火の影も、やや近く、高欄のもとに、鵜飼するなどは、誠に、めざましき見ものなりけらし。かの、瀟湘の八つのながめ、

西湖の十の境

西湖は、東京河内省懷徳府永順縣にあり。十境とは、蘇堤春曉、雙峯挿雲、柳浪聞鶯、花港觀魚、曲院風荷、平湖秋月、南屏曉鐘、三潭印月、雷峯西照、斷橋殘雪。

西湖の十の境も、涼風一味のうち、に思ひやるべし。もし、この樓に、名をいはんとすれば、十八樓ともいはず。まほしきなり。

このあたり、目に見ゆるもの、皆涼し。(松尾桃青 風俗文選)

一二 筍あらそひ

初アト「罷り出でたる者は、このあたりに、住居致す者でござる。某は、畑を、數多持ってござるが、當年は、某の畑に、隣の藪から、根のさいて、竹の子がきたと申す。今日は、参り、すこし、竹の子を取って、参らうと存ずる。誠に、世の中に、蒔いた物のはゆるは、尤でござる。蒔かぬ物のはゆるといふことは、重寶なこどぢや。参る程に、これぢや。さてもさても、見事な竹の子が出



來た。まづ、これは折りませう。ほんほん。

シ「罷り出でたる者は、このあたりの者でござる。某、藪を、  
數多持つてござるが、當年は、竹の子が、大分出來てござる。今  
日は、藪へ參り、垣なども結はせ、人の取らぬやうに致さうと  
存ずる。惣じて、何時とても、竹の子時分には、人が取りたがる  
こととでござる。やあ、參る程に、これぢや。さても夥しう出來た。

ア「ほんほん。シ「これこれ、なぜに、その竹の子を取らしま  
す。ア「やあ、お出やったよ。何と、この竹の子を、なぜに取る。

シ「なかなか。ア「これは、身共が畑に生えたによつて取る。わ  
ごりよ構やるな。シ「尤も、畑は、そちのなれども、竹の根のさ  
いたは、こちの藪からぢやによつて、取らすことはならぬ。

ア「わごりよは、無理なことをいふ。どうしても、身共が畑に生  
えた故、取らねばならぬ。構やるな。シ「お主は、ていと取るか。

ア「ていとというて、何とする。シ「目に、物見せう。ア「それは  
たれが。シ「身共が。ア「そちが、物見せだては、措いてくれい。

シ「悔むな。ア「悔むことはおりにない。シ「おのれは、憎い奴  
の。ア「やれ、出合へ、出合へ。

後ア「ト「やいやい、これは、何事ぢや、何事ぢや。まづ待ちやれ。  
シ「やあ、よい所へお出やった。まづ、お主も聞いてたもれ。あれ

が、身共の竹の子を取るによつて、取らすまいといへば、是非  
取らうといふゆゑに、追ひまはす。取らぬやうにというてた  
もれ。後ア「尤ぢや。その通いうてやらう。それに待たしめ。な



うなう、わごりよは、なぜに、隣の竹の子を取るぞ。ア「やあ、そなたは、よい所へ出さしました。まづ聞いて呉れさせませ。隣の竹の子を取りは致さぬ。身共が畑に生えた竹の子を取れば、取らすまいといふによつてのことでありやる。後ア「さては、わごりよが畑に出来たか。ア「なかなか。後ア「これは、あれがのが無理ぢや。その通いはう。今の聞かしましたか。シ「なかなか、聞いた。尤も、畑に生えたれども、根をさいたは、此方の藪からぢや。後ア「さうはいはれまい。シ「はいはれまい。お主頼むことではない。退かしめ。後ア「まづ待ちやれ。その通いうて見よう。今のを聞かせられたか。ア「それは、無理なことをいふ。それならば、今から、根のささぬやうにせいとい

うてたもれ。後ア「なうなう、それならば、今から、根のささぬやうにしてたもれといはるる。シ「さてもさても、いはるるものぢや。それならば、身共も、亦、あれが方から取る物がある。取つてたもれ。後ア「それは、何ぢや。シ「何時ぞや、あれが牛が、身共が馬屋で、子を産んだなれども、身共は、律義に、親牛も、子も、皆牽かせてやった。それならば、あの時の牛の子は、こちへおこせというてたもれ。後ア「心得た。なうなう、最前からのは、其方の理分にしてやらう。その代に、牛の子をおこせいといふは。ア「さてもさても、いへばいはるるものかな。さりながら、思うても見やれ、牛の子と、竹の子とは、一口にはいはれまい。



後ア「いやいや、このやうに、互にいうては、埒が明かぬ。この上は、何ぞ勝負をして、そのかち負によつて、牛の子を遣るものか、遣らぬものかにせう。何とあらう。ア」して、勝負には、何を致さう。後ア「されば、何がよからうぞ。ア」身共は、歌を詠まう。あれも詠むか、問うてたもれ。後ア「なうなう、これでは、埒が明かぬによつて、勝負に、歌を詠まうといふが、そなたも詠むか。シ」あの人の歌は、終に承らぬ。それなら、まづ、あれから詠めというて下され。後ア「さあさあ、急いで詠ましめ。ア」かうもござらうか。わが畑へ、隣の竹の根をさいて、思はず知らぬ、竹の子を取る。後ア「一段と出來た。ア」あれにも詠めとおしやれ。後ア「さあさあ、急いで詠ましめ。シ」かうも

ござらうか。わが馬屋で、隣の牛の子をうみて、思はず知らぬ、牛の子を取る。後ア「一段出來た。さりながら、これも同じやうな事ぢや。重ねて、何ぞ、勝負をしやれ。シ」それならば、この度は、相撲を取らうというてたもれ。後ア「なうなう、相撲を取らうといふは。ア」いかにも取りませう。後ア「それならば、お出やれ。シ」さあさあ、行司をめさせ。後ア「心得た。お手つ。ア」いや、いや。シ「勝つたぞ、勝つたぞ。ア」あのやうに、棒で打ちまはす相撲は、つひに取つたこととがござらぬ。棒を、下に置いて取れというてたもれ。後ア「なうなう、その棒を、下に置いてお取りやれ。シ」いやいや、これは、身共が、一方の足ぢやによつて、下に置くことはならぬ。



後ア「なうなう、下に置くことはならぬといふは。とかく、あの棒に取り付けばよい程に、棒をお取りやれ。ア「心得た。それならば、もう一番取らうとおいやれ。後ア「も一番取らうといはるるは。シ「いかにも取りませう。さあさあ、行司をなされ。後ア「お手つ。ア「やあやあ、勝つたぞ、勝つたぞ。シ「やいやい、相撲は、三番のものぢや。遣るまいぞ、遣るまいぞ。その足をかやせ。(狂言記)

### 一三 丈夫の志

學究の徒、ややもすれば、驕慢に陥り、英雄崇拜を以て、兒戲となし、唯、人は、自ら恃むべきを謂ふ。理は、則ち理なり。然れど

も、生命の裏には、感情あり。春花を看れば、則ち怡び、秋月に對すれば、則ち傷むもの、これ、人生の自然に非ずや。然らば、則ち、人中の人を崇び、士中の士を拜するも、亦、人生の自然のみ。春花、美感を興さしめ、秋月、靜思を惹くべくば、偉人も、亦、偉志を誘ひ、英雄も、亦、雄心を導くべし。人の、この間より大化し、優遷するもの、擧げて言ふべからざるものあらん。

孔子の聖を以て、周公を崇拜したるは、「われ、復、夢に、周公を見ず」と歎じたるにても、察すべし。諸葛孔明は、一代の奇才なり。身を、管仲樂毅に比したりと謂はずや。學究の輩、みづから視て、孔子よりも聖に、諸葛よりも才なりといふか。カロロト二世、少にして、クインツス、クルチウスを讀み、アレクサンド

管仲  
名は夷吾。齊の桓公を輔けて、天下に覇をたらしむ。(一六年)  
樂毅  
燕の名將。齊と戦うて、その七十餘城を下す。



カロロ十二世  
瑞典王。(二三  
四三年—二三  
七八年)  
クインツ  
ス、クルチ  
ウス  
アウグスト時  
代の、ローマ  
の歴史家。

コルシカ  
地中海にあ  
る佛領の嶋。  
ホメロス  
古代希臘の大  
詩人。

ル大王を欽慕して已まず。人あり、問うていはく、「アレクサン  
ドルは、如何なる人ぞ。」カロロ、直に應じていはく、「大丈夫、應に  
かくの如くなるべし」と。問者、重ねていはく、「大王、三十二歳に  
して歿す。不幸短命に非ずや。」カロロ、頭を振つていはく、「百國  
を戡定すること、かれが如くならば、われにおいて、亦足れり。  
何ぞ、壽と天とを問はんや」と。ナポレオン一世が、幼年學校よ  
り出で、始めて、巴里の士官學校に送らるるや、ユルシカの母  
に贈れる書中にいはく、「長劔を横たへ、ホメロスを懷にし、世  
界統一の途に上れり」と。二帝、畢生の事業を看よ、宛として、ク  
インツス、クルチウス中の大王、ホメロス史中の英雄にあら  
ざる無し。

西郷隆盛は、今世の人豪なり。その詩を誦せよ。

建業只期和聖東、鬪爭獨希那破翁。

通宵提劔望寒月、今古興亡在眼中。

と。その志の存せし所も、亦、以て察すべきなり。惟ふに、これら  
の諸先人たる、皆、天縱の聖哲英雄なり。文王なしと雖も、また、  
興るべき人なり。しかも、なほ、古の聖哲英雄を崇拜し、これに  
私淑するや、かくのごとし。然るを、いはんや、切瑳琢磨し、工夫  
刻苦し、始めて、地點を占有すべき、水平線上の人士において  
をや。

この頃、偶、新聞の中より、一の趣味を感得せり。わが現在の  
相將中、或者は、ビスマルクを慕ひ、或者は、徳川家康を欽し、或

文王  
聖人。周の武  
王の父。



加藤清正

(一六二二—一六八五)

眞田幸村

(一六二二—一六七五)

高杉東行

(一八二七—一八六〇)

名は春風、通稱管作、東行と號す。勤王家。二四九九年—二五二七年

青蛙の黄犢學

者は、ナポレオンを崇び、或者は、西郷隆盛を拜し、或者は、モルトケを仰ぎ、或者は、諸葛孔明に嚮へり。その他、石田三成といひ、伊達政宗といひ、加藤清正といひ、眞田幸村といひ、楠木正成といひ、水戸光圀といひ、吉田松陰といひ、高杉東行といひ、人人の志同じからざれども、諸相將の、今日あるは、その、古人に得たるもの、必ず尠少ならざるを知る。

英雄崇拜宗も、亦悪しからず。われは、この宗に歸依する者の、一人にても多からんことを希望する者なり。然りと雖も、古聖前賢は、天縱の偉器に加ふるに、切磋琢磨の工夫を以てし、然る後、史上に、その名を垂れたり。もし、この工夫を放却し、徒に、その人たらんを思はば、これ、青蛙の黄犢學のみ。臍下を

ラフオンテ  
の警諭小説  
中にある。

膨して、願盼、自ら喜び、腹皮張り裂けて、立地に仆れざる者、幾ど罕ならん。天下の青衿、それ、これを戒めよや。(福本誠)

一四 自警

予、年二十以後、乃ち知る、匹夫も、一國に繋るあるを、三

余年二十以後  
乃ち知る、匹夫も、一國に繋るあるを、三  
以、天下、四、五、  
乃ち知る、匹夫も、一國に繋るあるを、三



佐久間象山肖像

十以後、乃ち知る、天下に繋るあるを、四十以後、乃ち知る、五



世界に繋るあるを。

日晷一たび移れば、千歳再來の今なし。形神既に離るれば、萬古再生の我なし。學藝事業、あに悠悠たるべけんや。

人の己を譽むる、己において、何をか加へん。もし、譽に因りて、自ら怠らば、即ち、反りて損せん。人の己を毀る、己において、何をか損せん。もし、毀によりて、自ら強うせば、即ち、反りて益せん。

身に、規矩を行はば、即ち、嚴ならざるべからず。これ、己を治むる方なり。己を治むるは、即ち、人を治むる所以、人に、規矩を待たば、即ち、嚴に過ぐべからず。これ、人を安ん

ずる道なり。人を安んずるは、即ち、自ら安んずる所以。

書を読み、學を講じ、徒に、空言をなし、當時の務に及ばざるは、清談、事を廢すると、一間のみ。(佐久間啓省譽錄)

### 一五 白石と宣長

白石の歿せしは享保十年にして、宣長のうまれしは享保十五年なり。即ち、僅に六年を隔てて、この二偉人は、遂に、相知ることを得ざりしなり。余は今、ここに、二偉人といへり。おもふに、徳川氏三百年の治世を通じて、偉大なる人物を、わが學界の上に求めば、この二人を措きて、他に、また、その人なかるべきなり。しかして、この二偉人の間に存する、著き類似と、甚



しき差異とは、特に考究すべき興味ある問題なるべし。

白石は漢學者にして、宣長の國學を以て立ちしと同じか  
らず。されど、白石は、主客の別を辨へざる漢學者にはあらず  
して、常に、漢文が、わが國語の發達を妨げたるを論じて、大い  
に、これを悲めり。これ、よく、宣長の、漢意を排斥したると似た  
るにあらずや。更に、その事業の多面多趣なりしに至りては、  
余は、兩者の間に、その、いちじるき類似のものあるを認めず  
ばあらず。綿密なる財政家として、敏腕なる外交家として、は  
た、卓絶せる歴史家として、文章家として、詩人として、さては、  
西洋學の鼻祖として、卓見なる語學者として、驚くべき多才  
多能なる白石は、皇學、および、神道を中心としたる、すぐれた

る神學者として、歴史家として、更に、非凡なる語學者として、  
詩人として、文學批評家としての宣長と、雙雙相對して、共に、  
わが學界に、千古不滅の異彩を放てるにあらずや。しかも、こ  
の二偉人を比較して、ことに、余の、いひ難き趣味を感ずるは、  
その一面において、かくいちじるき類似を示せるにかかは  
らず、また、他の一面において、その、甚しき差異をあらはせる  
こと、これなり。

白石は、峻嚴、秋霜の如き人なりき。しかして、宣長は、溫厚、ま  
ことに、春風の如き人なりき。一は、廟堂に立ち、堂堂の議をな  
して、君の忌諱に觸るるを辭せず。一は、世の外に、庵を結び、鈴  
を鳴して、從容自適す。この性格の差異、むしろ驚くべきにあ

家庵



らずや。その他、白石が弟子を有せざりしに反して、宣長は、全



本居宣長肖像

國に、弟子を有し、六十六國の  
中、弟子のなき國は、僅に、二國  
のみなりきといへる、白石は、  
政治上の偉能ありたるに反  
して、宣長は、その上に、何等の  
才能をあらはさざりしが如  
き、皆、その差異の甚しきを見  
るべきなり。

問の上に見よ、兩者は、ひとしく博學多能なりしかども、その

新井白石肖像



更に進みて、これを、その學

學風にいたりては、また、頗る異なるものあるにあらずや。即ち、

白石は、事實の實質に立ち入りて、創始を喜び、啓發を事とせ

るに、宣長は、考證を基とし、既成の事物の綜合をつとめ、組織

を念としたるにあらずや。試に、讀史餘論を見よ、東雅を見よ、

東音譜を見よ、よく、前人を抜きたる、白石の創始的才能は、明

に、これを認むることを得べし。更に去つて、古事記傳を見よ、

玉の緒を見よ、三音考を見よ。前代、および、同時代の學問を統

一したる、宣長の偉大なる手腕は、よく、これを詳にすること

を得べし。白石は、また、理を本とし、宣長は、また、信仰を本とせ

り。一は、科學家なり。一は、或意味において、宗教家なり。かれは、

韓語、梵語、宋元の音、西南洋の蕃語が、わが國語の中に進入し

讀史餘論

十二卷。六代  
將軍家宣が前  
に進講せしも  
の。

東雅

二十卷。本邦  
物名の語源を  
釋したるもの。

東音譜

一卷。わが五  
十音を、支那  
諸州の音と對  
照して、その  
音韻を説明し  
たるもの。

古事記傳

五十卷。古事  
記の註釋。宣  
長が、前後三  
十五年を費  
し、一生の心  
血をそそぎた



るもの。

玉の緒

詞の玉の緒の略。七卷にてはの性質用法等を脱けるもの。

三音考

漢字三音考の略。一卷。三音とは、漢音、吳音、唐音なり。

土屋侯

久留里の藩主土屋利直。

堀田

古河侯堀田正俊。二二九四年—二三四四年

甲府

徳川家宣。二二二二年—二二二七年

たるを説き、これは、鼻音を排し、半濁音を説きて、濁濁なる外國音の、清純なる、わが國音を侵す能はざるを説けり。白石はまた、實地の日本にむかはんとし、宣長は、また、理想の世界に進み入らんとす。一たび、白石の書を讀みて、轉じて、宣長の書に對するときは、何人か、よく、その逕庭の甚しきに驚かざるものあらん。

逕庭

驚かざる

しかして、その生涯の逕路の、更に、また、大いなる差異を示せるに至りては、まことに、一奇といはざるべからず。土屋侯の一足輕の子として、はやく、人を驚したる幼年時代と、失意に満ちたる中年時代とを送りて、やがて、堀田甲府の二侯に仕へ、忽にして、天下の大事に參與し、榮譽寵遇を極めたりし

二男三女

春庭、春村、飛騨、美濃、能登。

山室山

伊勢國飯高郡妙樂寺中。

千歳の春云

宣長の歌に、「山室に千年の春のやどしめて、風に知られぬ花をこそ見め」。

が、六十一歳の時、時勢の變に遇ひ、一朝にして、榮辱地をかへ、寂しく、晩年を送りたる白石と、幸福なる木綿問屋の子として、十分なる普通教育をうけ、書を好むが故に、醫を學ばしめられ、紀州侯の奥殿に奉仕して、靜に、好學の心を養ひ、二男三女を擁して、遂に、山室山に、千歳の春を樂める宣長とを比較すれば、驚くべき境遇の差異の、うたた、人をして、いひ難き感懐にうたれしむるものあるにあらずや。しかして、一は、伊勢の如き、平和の地にうまれて、優然として、學の研究に従ひ、一は、江戸の如き、混亂の渦中に投じて、奮然として、世と闘へるは、また以て、その差異の、偶然にあらざるを見るべきなり。白石と宣長との性格境遇の差異、かくの如く大いなるも



軒輕

のあり。されど、わが學界の偉人たるにいたりては、まことに、軒輕すべからざるものあり。これをや、天才の偉人の、その兩極端にむかひて、遺憾なく發達したる一好例といふべからん。(上田萬年「國語のため」)

### 一六 門を造る説

不二の屋のあるじ、新に門を造らんとす。まづ、その費を定め、さて、工を呼びて、おほせていはく、「造るべきものは、扉なり、柱なり、左右の翼なり。されど、新しき材をな費しそ。廢るべきものを用ゐて、補ひしつらへ。價の定を超ゆることなかれ」と。工、よく、その意を得て、古きものを繕ひたてて、かつかつ、あるべき様に造りなしつ。

べき様に造りなしつ。

或人、これを見ていはく、「あな、怪しの門の様や。扉をいかめしくしたるは、少納言のおもおまとに笑はれじとや。さらば、柱を、檜にもせよかし。蟲喰木こそ、いとにくげなれ。それも、左右、太さ等しからばこそあらめ、兼好法師が「ととのほりたる悪し」との誠を守れらんにも、片落なるぞ、いと見苦しき。翼の塀焼きたる、はた、似げなし。扉よりみば、生澀なまじにやあらん。蟲喰柱よ、りみば、建仁寺垣ぞふさはしかるべき」と。

主、ほほ笑みつついふ。さな言ひそ。國語學者の家、子孫の世も、大方推し量りつべし。いかで、門の廣きをもとめん。しみのすみか、常に、物足らぬことのみなり。何かは、わざと、缺けたる

少納言のおもと云云

清少納言をいふ。大進生昌が家の門の狭きを、于定國の故事をひきて笑ひしこと、枕草子に見えたり。

兼好法師

卜部氏、吉田に居るを以て、吉田と號す。(一九四二年—二〇一〇年)

ととのほりたる悪し

徒然草に、「すべて、何も皆、事のととのほりたるは悪しきことなり」。



ところ造るべき扉のいかめしきは、長屋門のなりしを削り  
清めつればなり。柱の同じからぬは、ミツクシ漆標の廢れしを用ゐた  
ればなり。扉を焼きたるは、古き材を集めて造りたればなり。  
本づくところ、價に、限あるからに、すたれ物をば用ゐ、すたれ  
物を用ゐるからに、さてこそ、怪しき様ともなれるなれ。

されど、君、眼をうつして、世の文の様を見よ、わが、この門に  
もまして、あやしきものならずや。漢文様なる、國文風なる、あ  
るは翻譯體に、あるは俗言のままに、一篇の論說、一段の紀事、  
皆、これら、さまざまの體を交へて、連ね成せるものに非ざる  
は無く、また、古文中、普通文と小説文との如き、王朝文と覇府  
文との如きは、互に、こよなきたがひあるものなるを、相連ね

て、一章一句の中に用ゐるなど、君は、これを如何にとかみる。  
わが門の扉は、古きものなれど、なほ削り清め、柱は、漆標なれ  
ど、なほ、貫の穴は塞ぎぬ。今の世の文に用ゐる材は、これを削  
らず、つくるはず、ただ、そのもとの儘にて集め造るに非ずや。  
筆とる人は、『文は、意を載する器なり。意をだに載せ得たらん  
には、詞は如何にともあるべし』とこそいふめれ。げに、詞は、古  
と今とをわかず、かれとこれとを交へたらん、何でう事のある  
べき。ただ、その體に至りて、おのづから、一の姿なかるべか  
らず。然らざらんには、その要とある意をも、ありのままには  
載せ得難くして、遂に、器の用をも、缺きぬべきをや。今、わが門  
は成りぬ。評當れりとして、造り改むべきに非ず。世の文體の如



き、今猶、定れりといふべからず。君、わが門を怪しと見る眼あらんには、いかで、それをうつして、文體の事をば論ぜざると。

その人答へず、打ち笑ひて去りぬ。やがて、その言葉を書き記して、門を造る説とはなせり。(中村秋香「不盡廻舍遺稿」)

一七 そぞろごと

一、雪の朝

雪のおもしろう降りたりしあした、人のが<sup>モト</sup>り、いふべき事ありて、文を遣るとて、雪のこと、何ともいはざりし返事に、「この雪いかが見ると、一筆のたまはせぬほどの、ひがひがしからむ人の仰せらるる事聞き入るべきかは。かへすがへすく

ちをしき御心なりといひたりしこそをかしかりしか。今は、なき人なれば、かばかりの事も忘れがたし。(徒然草)

二、青き眼

さしたる事なくて、人のがり行くは、よからぬ事なり。用ありて行きたりとも、その事果てなば、とく歸るべし。久しく居たる、いとむづかし。人と對ひたれば、詞も多く、身もくたびれ、心も静ならず、よろづの事障りて、時を移す。互の爲、益なし。いはしげにいはむもわろし。心づきなき事あらむ折は、なかなか、その由をもいひてむ。同じ心に對はまほしく思はむ人のつれづれにて、今しばし、今日は、心静になどいはむは、この限にはあらざるべし。阮籍が青き眼、たれもあるべき事なり。

阮籍が青き眼  
晉書に、阮籍が事をいひて、不<sub>レ</sub>拘<sub>二</sub>禮敬、能爲<sub>二</sub>青白眼對<sub>レ</sub>人。



その事となきに、人のきたりて、のどかに物語して歸りぬる、いとよし。又、文も、久しく聞えさせねば、などばかりいひおこせたる、いと嬉し。(徒然草)

三、過ぎにし方

静におもへば、よろづ過ぎにし方の戀ひしさのみぞせむ方なき。人しづまりて後、長き夜のすさびに、何となき具足取りしたため、のこし置かじとおもふ。反古などやり棄つる中に、なき人の手習ひ、繪かきすさびたる、見出でたるこそ、ただそのをりのこちすれ。この頃ある人の文だに、久しくなりて、いかなるをり、いつの年なりけむと思ふは、あはれなるぞかし。(徒然草)

四、賤しげなる物

賤しげなるもの、居たるあたりに、調度の多き、硯に、筆の多き、持佛堂に、佛の多き、前栽に、石草木の多き、人にあひて、詞の多き、願文に、作善、多く書き載せたる。多くて見苦しからぬは、文車の文、塵塚のちり。(徒然草)

五、見ぬ世の友

ひとり、燈火の下に、文をひろげて、見ぬ世の人を、友とするこそ、こよなう慰むわざなれ。文は、文選のあはれなる卷卷、白氏文集、老子のことば、南華の篇。この國の博士どもの書けるものも、いにしへのは、あはれなる事多かり。(徒然草)

文選 六十卷。梁の昭明太子の編、周以來の詩文集。  
白氏文集 七十五卷。唐の白居易の詩文集。  
南華の篇 莊子のこと。八卷。莊周の著。唐の代、莊子を尊びて、南華真人と號せしより、一に南華真經といへり。



一八 熊野落 隱形咒

大塔宮 護良親王のこ  
と。當時尊雲  
法親王と稱  
す。時に年廿  
四。

般若寺

律宗。奈良市  
奈良阪の南に  
あり。

虎の尾を履

む  
危険を冒すに  
喩ふ。易經、  
書經に出てた  
る語。

一乘院 奈良にあり  
き。

大塔宮二品親王は、笠置の城の安否を聞き召されむ爲に、  
暫く南都の般若寺に忍びて、御座ありけるが、笠置の城既に  
落ちて、主上囚れさせ給ひぬと聞えしかば、虎の尾を履むお  
それ、御身の上に薄りて、天地廣しと雖も、御身ををさめらる  
べき所なし。日月明なりと雖も、長夜に迷へる心地して、晝は、  
野原の草に隠れて、露に臥す鶉うらうの牀に、御涙を争ひ、夜は、孤村  
の辻に佇みて、人を咎むる里の犬に、御心を惱され、何處とて  
も、御心安かるべき所なかりければ、かくても暫時はと思し  
召されける所に、一乘院の候人按察あさつ法眼好專、いかがして聞  
きたりけむ、五百餘騎を率ゐて、未明に、般若寺へぞ寄せたり

大般若 佛經の名、六  
百卷あり。唐  
の玄奘三藏の  
譯。

ける。折節、宮に付き奉りたる人、一人もなかりければ、一防ふ  
せぎて、落ちさせ給ふべきやうもなかりける上、透間もなく、  
兵、既に、寺内にうち入りければ、紛れて御出あるべき方もな  
し。さらば、よし、自殺せむと思し召して、既におし膚脱がせ給  
ひたりけるが、事協はざらむ期に臨みて、腹を切らむことは、  
いと易かるべし。もしやと、隠れて見ばやと思し召し反して、  
佛殿の方を御覽ずるに、人の讀みかけて置きたる大般若の  
唐櫃三つあり。二つの櫃は、いまだ、蓋を開けず、一つの櫃は、御  
經を、半過ぎ取り出して、蓋をもせざりけり。この蓋を開けた  
る櫃のうち、御身を縮めて、伏させ給ひ、その上に、御經を引  
きかづきて、おんぎやう隱形の咒を、御心の中に唱へてぞおはしけるも



し捜し出されなば、やがて突き立てむと思し召して、氷の如くなる刀を抜きて、御腹に指し當て、兵、「ここにこそ」といはむずる一言を待たせ給ひける御心の中、推し量るも、尙淺かるべし。さる程に、兵、佛殿に亂れ入りて、佛壇の下、天井の上までも、残る所なく捜しけるが、餘に求めかねて、「これ體ていの物こそ怪しけれ。あの、大般若の櫃を開きて見よ」とて、蓋したる櫃二つを開きて、御經を取り出し、底を翻して見けれどもおはせず。蓋開けたる櫃は見るまでもなしとて、兵、皆、寺中を出て去りぬ。宮は、不思議の御命を續がせ給ひ、夢に、道行く心地して、猶、櫃の中におはしけるが、もしまた、兵立ちかへり、委しく捜す事もやあらむずらむと、御思案ありて、やがて、前に、兵の捜

玄奘三藏  
唐の名僧。(一  
二六〇年—  
三二四年)

し見たりつる櫃に入り替らせ給ひてぞおはしける。案の如く、兵共、また、佛殿にたちかへり、前に、蓋の開きたるを見ざりつるが覺束なしとて、御經を、皆うち移して見けるが、からからとうち笑ひて、「大般若の櫃の中を、よく捜したれば、大塔宮はいらせ給はて、大唐の玄奘三藏こそおはしけれ」と戯れければ、兵、皆、一同に笑ひて、門外へぞ出てにける。  
かくては、南都邊の御隱家もかなひ難ければ、乃ち、般若寺を御出ありて、熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御伴の衆には、光林坊玄尊、赤松律師則祐、木寺相模、岡本三河坊、武藏坊、村上彦四郎、片岡八郎、矢田彦七、平賀三郎、彼此、以上九人なり。宮を始め奉りて、御伴の者までも、皆、柿の衣に、笈を掛け、頭巾、眉



由良の湊  
淡路の東岸にあり。

半にせめ、その中に、年長ざるを、先達に作り立て、田舎山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける。この君、もとより、龍樓鳳闕の内に長らせ給ひて、華軒香車の外を出てさせ給はぬ御事なれば、御歩行の長途は、定めて協はせ給はじと、御伴の人、かねて、心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねども、怪しげなる單皮脚巾草鞋を召して、少しも、草臥たる御氣色もなく、社社の奉幣、宿宿の御勤懈らせ給はざりければ、路次に行き逢ひける道者も、勤修を積める先達も、見咎むる事なかりけり。

由良の湊を見渡せば、澳漕ぐ船の楫緒たえ、浦の濱ゆふ幾重とも、知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀伊路の遠山渺渺と、藤代の

藤代、和歌、吹上、玉津嶋  
共に紀伊國海草郡。

雨を含める  
云云

唐の盧綸の詩に、孤村樹色昏殘雨、遠寺鐘聲送夕陽。

切目の王子  
日高郡切目村。

兩所權現  
熊野本宮と新宮とをいさす。



あれ、切目の王子に著き給ふ。

その夜は、叢祠の露に、御袖をかたしきて、通夜祈り申させ給ひけるは、傳へ承る、兩所權現は、これ、伊弉諾、伊弉册の應作

松にかかれる磯の浪、和歌吹上をよそに見て、月に瑩ける玉津嶋、光も今はさらでだに、長汀曲浦の旅の路、心を碎くならひなるに、雨を含める孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、あはれを催す時しも

伊弉册



神ノ人々世界を見る

熊野三山  
本宮新宮に、  
那智を加へて  
稱す。  
十津河  
大和國吉野  
郡。

なり。わが君、その苗裔として、今朝日、忽に、浮雲のために隠されて、冥闇たり。あにいたましからずや。玄鑿むなしきに似たり。神、若し神たらば、君、何ぞ君たらざると、五體を、地に投げて、一心に、誠を致して、ぞ祈り申させ給ひける。丹誠無二の御勤、感應、などかあらざらむと、神慮も、暗に測られたり。終夜の禮拜、御窮屈ありければ、御肱を曲げて、枕として、暫く、御目睡ありける。御夢に、鬢結ひたる童子一人來て、熊野三山の間は、なほも、人の心不和にして、大義成りがたし。これより、十津河の方へ御渡り候ひて、時の至らむを御待ち候へかし。兩所權現より、案内者に附けまゐらせられて候へば、御道指南仕るべく候ふと申すと御覽ぜられ、御夢は、即ち覺めにけり。これ、權

山路もとよ  
り云云  
王維の詩に、  
「山路元無  
雨、空翠濕  
人衣。」  
見上ぐれば  
云云  
遊仙窟に、「向  
上則有二青壁  
萬尋、直下則  
有二碧潭千  
仞。」

現の御告なりけりと、たのもしく思し召されければ、未明に、御悅の奉幣を捧げ、頓て、十津河を尋ねてぞ分け入らせ給ひける。その道の程、三十餘里が間には、絶えて、人里もなかりければ、或は、高峯の雲に、枕を敲て、苔の筵に、袖を敷き、或は、岩漏る水に、渴を忍びて、朽ちたる橋に、肝を消す。山路もとより、雨なくして、空翠、常に、衣を濕す。見上ぐれば、萬仞の青壁、刀に削り、見おるせば、千丈の碧潭、藍に染めり。數日の間、かかる嶮難を經させ給へば、御身もくたびれはてて、流るる汗、水のごとし。御足は、缺け損じて、草鞋、皆、血に染れり。御伴の人人も、その身、鐵石にあらざれば、皆皆飢ゑ疲れて、はかばかしくも歩み得ざりけれども、御腰を推し、御手をひきて、路の程十三日に、



十津河へぞ著かせ給ひける。(太平記)

一九 舊都の月

六月九日  
治承四年。

源氏の大將  
源氏物語の主  
人公。

須磨  
攝津國武庫  
郡。

明石  
播磨國明石  
郡。

繪嶋が磯  
淡路の北端。

住吉  
攝津國東成  
郡。

高砂、尾上  
播磨國加古  
郡。

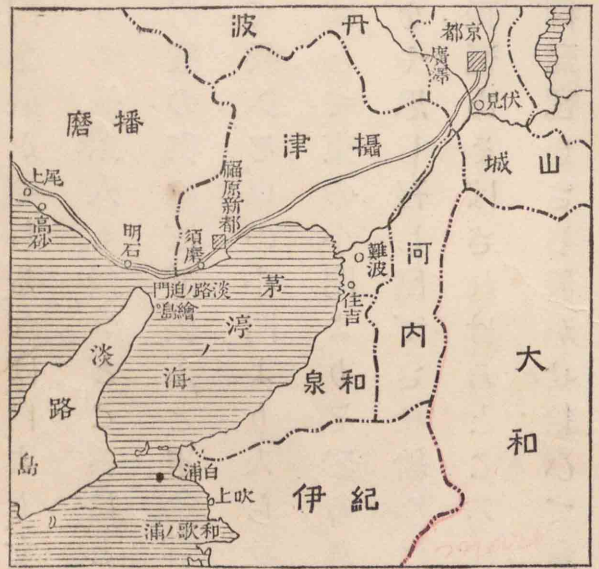
廣澤  
山城國葛野  
郡。

六月九日の日、新都の事始、八月十日の日上棟、十一月十三日遷幸と定めらる。舊き都は荒れゆけど、今の都は繁昌す。あさましかりつる夏も暮れて、秋にも、既になりにけり。秋も、やうやう半になり行けば、福原の新都にましましける人人、名所の月を見むとて、或は、源氏の大將の、昔の蹤をしのびつつ、須磨より、明石の浦づたひ、淡路の迫門ををし渡り、繪嶋が磯の月を見る。或は、白浦、吹上、和歌の浦、住吉、難波、高砂、尾上の月の曙を眺めて歸る人もあり。舊都に残る人人は、伏見、廣澤の

實定の卿  
藤原氏。一、  
の時年四十  
二、一七九九  
年一八一五(一  
年)

近衛河原  
鴨川の西岸に  
て、近衛通の  
東。

大宮  
近衛天皇の皇  
后藤原多子、  
實定の妹。(一  
八〇〇年一  
八六一年)



月を見る。中にも、徳大寺の左大將實定の卿は、舊き都の月を戀ひて、八月十日あまりに、福原よりぞ上り給ふ。

何事も、皆變りはてて、稀に残れる家は、門前、草深くして、庭上、露滋し、蓬が袖、淺茅が原、鳥のふしどと荒れ果てて、蟲の聲聲、怨みつつ、黃菊紫蘭の野邊とぞなりにける。今、故郷の名残とては、近衛河原の大宮ばかりぞましましける。大將、その御所にまゐり、まづ、隨身を以て、惣



門を敲かせらるれば、内より、女房の聲にて、「誰そや、蓬生の露  
 うち拂ふ人も無きところに」と咎むれば、「これは、福原より、大  
 將殿の御のぼり候ふ」と申す。七條の御所「さはべらば、惣門は、錠のさされ  
 て候ふぞ。東の小門より入らせ給へ」と申しければ、大將、「さら  
 ば」とて、東の小門よりぞ參られける。大宮は、御つれづれに、昔  
 をや思し召し出でさせ給ひけむ。南面の御格子上げさせ、御  
 琵琶あそばされけるところに、大將、つと參られたれば、暫く、  
 御琵琶をさし置かせ給ひて、「夢かや、現か。これへ、これへ」とぞ  
 仰せける。源氏の宇治の卷には、優婆塞ほせの宮の御女、秋の名殘  
 を惜みつつ、琵琶を調べて、夜もすがら、心をすまし給へるに、  
 有明の月の出でけるを、猶足らずや思しけむ。撥にて招き給

優婆塞の宮  
 云云  
 源氏物語宇治  
 十帖のうち、  
 橋姫の卷にあ  
 り。

ひけむも、今こそ思し召し知られけれ。

小侍従と申す女房も、この御所にぞ侍はれける。大將、この  
 女房を呼び出でて、昔今の物語どもし給ひて後、小夜も、やう  
 やう更け行けば、ふるき都の荒れゆくを、今様にこそ謠はれ  
 けれ。

ふるきみやこを、 來て見れば、

あさぢが原とぞ、 なりにける。

月のひかりは、 くまなくて、

あき風のみぞ、 身にはしむ。

と、おしかへし、おしかへし、三反うたひすまされたりければ、  
 大宮をはじめ奉りて、御所中の女房たち、皆、袖をぞ沾されけ







雪舟

畫伯。通稱小田等揚、雪舟はその號。二〇八〇年—二一六六年

妙義山

北甘樂郡。

上に斗出し、逗子灣を隔てて、小坪岬と相對し、恰當の觀月臺に候。やがて、月は、鐙摺山の背より出てくれば、海上蒼茫として、只、ここかしこに、月影の反射を見るのみ。當面の富嶽は、雪舟の描ける淡墨畫の如く、恍惚として、まことに、夢の如くに候。不思議なるかな、かねて見おぼえもなき奇峯、突兀として、富嶽の周圍に立ち竝ぶ。こは、上州なる妙義山の飛び來れるにか、さても面白きことよと、篤と吟味致しつれば、雲にてありしもをかしく候。われら二人は、輿に乗じ、聯歩快談はやくも、天地深寂たる、森戸川の橋上にいたり候。月は、まさに、われらの帽簷にきしり上り候。清光は、限なく、相模洋より、伊豆の嶋嶋

を照し候。海上に天あり、天上に海あり。月は、海上にあるか、波は、天上にあるか。月と共に涌きくる高潮は、寄せて、捲きて、碎けて、散りて、黄金の波となり、白金の浪となり、眞珠の濤となり、錦繡の瀾となり、天地の心をいひやぶる、雄大玄深なる音樂を奏し候。

森戸川を渡りて、右に折れ、亂松の間を蛇行すれば、やがて、森戸神社なり。松林、帯のごとく、海上につらなり、林盡きて、巖そびゆるところ、祠堂あり。幾多の巉巖を隔てて、名嶋と相對し候。まづ、このもよりの絶景の一にて候。東鑑を按ずるに、元暦元年五月十九日、武衛、逍遙、海濱、給、自、由、比、浦、御、乘、船、令、著、杜、戸、岸、給、御、家、人、等、面、面、飭、舟、船、各、取、

東鑑 五十一卷。治承四年以後八十七年間の鎌倉幕府の記録。  
武衛 頼朝。

カヤ

カ

カ



今人不見  
唐の李白の  
把酒問月詩  
中の句。

井上梧陰  
名は殺、熊本  
の人。(二五〇  
三年―二五五  
四年)

棹争前途其儀殊有興也於杜戸松樹下有小笠懸是士風也と見え候。かれを想ひ、これを憶うて、いとど昔の人のしのばれ申し候。今人不見古時月、今月曾經照古人。古人の懐しきにつけても、また行末、いかなる人をば照すらんなど思ひつつ、歩行致すほどに、いつしか、突渡の崎にさしかかり候。これよりは、井上梧陰先生の別墅も、ほど近し。ついでなれば、門を敲くも一興ならんとて、捷路を取りて、濱邊に下り行き候。

月は、ますます冴えて、潮はいよいよ高く、ことに、この邊は、奇礁狂巖亂立したれば、濤聲凄じきばかりに候。ふと見れば、かなたの巖上に、大いなる鷲の如きものたたず

み居り候。近づけば人なり。さらに近づけば、思ひきや、梧陰先生ならんとは。

かくて、先生に導かれて、濱邊の裏門より入り、榻を庭除に移し、キヤマン婆娑たる、松間の月影を眺めつつ、江湖の漫談にうち興じ、おぼえず、時刻を移し候うち、生憎や、怪雲、月を掠め來り候。いざ、さらばと辭して、濱邊に出づれば、黒紗の如き雲の絶間より、月こそあらはれて候へ。

三五の村舎、今は、死よりも靜に眠り候。ひややかなる風は、そよそよと、御最後川の汀に叢生したる蘆洲を吹き渡りて、髪ともなく、額ともなく、頬ともなく、嘗め候。黯淡たる雲に彩色せられたる月光は、青白く、六代御前の森

六代御前の  
森  
御最後川の畔  
にあり。平維  
盛の子六代法  
師の斬られた  
るところ。



の上にかかり候。御最後川の橋上より眺むれば、かすかなる火光一つ二つ、これ漁燈か、これ鬼火か、存じ申さず候。宿に歸りて、戸を敲くをりしも、雨點兩三、はらはらと、帽簷に零ち候。草草不宣。(徳富猪一郎)

二一 荒野の末

○

石川 依平

もののふの、いのちを露と、あらそひし、

あら野の末に、あきかぜぞふく。

○

加納 諸平

笠置山、あすのしぐれを、さきだてて、

みだるる雲に、あらしふくなり。

○

飯田 年平

こしかたは、とほくかすみて、春草の、

青野がはらに、きぎすなくなり。

○

土岐 光秋

ふき下す、木の葉も見えて、俱利加羅の、

山かげさむき、ゆふあらしかな。

○

山田 百枝

ここをせと、たちあらそひし、武士の、

その名ながるる、うぢの川なみ。

青野が原  
美濃國不破野  
の別稱。

俱利加羅山  
越中國西礪波  
郡礪波山のこ  
と。



二二二 故郷 その一

沐猴冠者  
楚の項羽をさす。史記に、「楚人沐猴而冠耳、果然」。

チエール  
佛人。西曆一八三二年宰相。一八七一年大統領となる。(二四五七年—二五三七

「富貴にして、故郷に歸らざるは、繡を衣て、夜行くが如し、誰か、これを知る者ぞ」とは、沐猴冠者の語なれども、實に、不朽の眞理を蘊みたるものと謂ふべし。業成り、名遂げたる者、誰か、故郷に歸るを欲せざらん。看よ、笈を負ひて、東京に出て、一片の卒業證書を懷にすれば、歸心、矢の如く、これを、故郷の親近父老に示さんと欲するにあらずや。彼等、何すれど、故郷に戀戀たる。チエールが、大宰相と爲るや、歸りて、その郷先生を訪ふ。先生いはく、君は、何の職業をなせるか。チエール答へていはく、余は、ミニスターなり。先生、色を變じていはく、君は、カトリック宗の信者にあらずや、改宗して、新教に入りたるか、胡

蘇秦  
支那戰國時代の策士。(一三四四年)  
六國  
燕、趙、韓、魏、齊、楚。

ど、ミニスターと爲れる。いはく、余が所謂ミニスターは、傳教師の謂に非ずして、宰相の謂なり。先生笑つていはく、戲言する勿れ。君、焉ぞ、大宰相たるを得ん。いはく、先生疑ふ勿れ。若し、余が言を信ぜずんば、先生の望む所を陳べよ。余、必ず、先生の爲に、これを遂げ得させん。先生いはく、余、教員恩給俸に與るを得ず。君、若し宰相たらば、請ふ、余が爲に、これを辨ぜよ」と。幾もなくして、郷先生に、恩給はさがりぬ。韓信が、楚王となるや、嘗て、己を辱めたる惡少年を擧げて、都尉となし、一飯の徳ある漂母に向つて、千金を施したり。蘇秦が、累累たる、六國の相印を帶ぶるや、まづ、その故郷に歸り、己が爲に、炊がざりし嫂、紙を下らざりし妻をして、蛇行匍匐、四拜、三十里外に郊迎せ



豊沛 江蘇省餘州府。  
銀杏村 尾張國愛知郡中村のこと。  
マウント、バーノン、ウォシントン 府の近傍。

しめたり。漢高の天下を平定するや、豊沛の父老を訪ひ、太閤の、小田原陣より旋るや、まづ、銀杏村に入れり。ウォシントンの退休するや、依然たるマウント、バーノンの一農夫となれり。彼等が、爛たる偉勳は、天下萬人の仰ぐ所なり。胡ぞ、それ、草澤山野、二三の父老の憐を乞ふを要せんや。而して、彼等が、天下に向つて、不世出の偉業を建つるや、恰も、小學校生徒が、進級證書を懐にして、まづ、その父母に示すが如く、故郷の父老に示す所以のものは、何ぞや。

獨、これにとどまらざるなり。彼等は、得意の時のみ、故郷を求めず、失意の時にも、求むるなり。彼等は、故郷より好遇せらるるが爲に、故郷を愛するにあらず、虐待せらるれども、尙、故郷を愛するなり。孔子の、魯を去る、遲遲として行きしに非ずや、基督の如きは、その郷人より、彼は、大工の子にあらずや、その母は、マリアにあらずや、その兄弟は、ヤコブ、ヨセ、シモン、ユダにあらずや、その妹等は、わが儕と偕に在るにあらずや。かれ、如何なる奇才異能かあると厭はれ棄てられたるに拘らず、彼は、屢、その故郷なるベテレヘムに還りしにあらずや。彼はいはく、豫言者は、その故郷に尊ばれずと。彼、これを知れり。然れども、尙、その故郷に戀戀たりしは、何ぞや。

孔子の魯を去る云云

孟子に、孔子去魯曰、遲遲吾行也、去父母國之近也。

基督

(六五七年—六八九年)

ベテレヘム イエルサレムの南なる小村。

### 二三 故郷 その二

何をか故郷といふ。その出産したる地方なるか、その成長



雅言

したる地方なるか。その出産成長したる村落を以て、故郷といふか。郡を以て、故郷といふか。縣を以て、故郷といふか。若しくは、更に大いなる地方を以て、故郷といふか。人の立つ所の位地に依りて、視る所の眼孔によりて、故郷も、亦、一なる能はざるなり。一村落よりすれば、その三五の近鄰は故郷なり、一郡よりすれば、その一村は故郷なり、一縣よりすれば、その一郡は故郷なり、一地方よりすれば、その一縣は故郷なり、一國よりすれば、その一地方は故郷なり、世界よりすれば、その一國は故郷なり、宇宙よりすれば、すべて、吾人人類の棲息する地球は故郷なり。然れども、これ、いまだ、以て、故郷の眞意を説明するに足らず。故郷は、必しも、客觀的の土地に非ず。唯、そ

古人  
中唐の詩人賈  
嶋。

并州、桑乾  
水、  
并州は、今の  
直隸省内の  
地。桑乾水は、  
同省内今の蘆  
溝河。

の人の心に忘れんと欲して忘るる能はざる、最初の感觸の刻せられたる處、これを、故郷といふのみ。古人の詩にいはいはく、  
客舍并州已十霜、歸心日夜憶咸陽、  
無端更渡桑乾水、却望并州是故郷。  
と。この時において、并州、却つて、故郷の感あるなり。然れども、愛郷の念、最も深きは、その感觸の、最も深き處に在り。感觸の、最も深きは、最も神聖なる聯感の、これに伴ふに在り。只これ、一片の青山のみ、然れども、吾人父祖の骨を埋めし處と思へば、風に臨んで、涙流るるなり。只これ、茫茫たる原野のみ、吾人の父祖が、忠義の爲に、千兵萬馬の間を馳驟し、その碧血を、野草に染めなしし處と思へば、懷舊の感、勃勃として來るな



インスピレ  
ーション  
靈感と譯す。

り。只これ、一株の栗樹のみ、然れども、吾人が、少年の時に、兄弟  
姉妹と、その下に戯れ遊びたりしを思へば、恰も、昔日のわれ、  
昔日の兄弟姉妹、昔日のわが家の、恍然として、眼中に入るな  
り。人の、故郷を愛するは、必しも、山水の絶佳なるが爲にあら  
ず。露西亞人は、白熊と同居すれども、故郷を以て、最愛の境土  
となすなり。倫敦人は、その、混混たる怪霧を以て、却つて誇る  
べしとなすなり。故郷は、一種のインスピレーションなり。思  
うて、故郷に至れば、無言の青山は、猶これ、千萬丈の記念碑の  
如く、茫茫たる原野も、猶これ、舊時の活歴史かと思はる。一木  
一草の微と雖も、なほ、千絲萬縷の情濃にして、傍人の、得て知  
るべき所にあらず。かくの如き所以のものは、何ぞや。

バイロン  
(二四四八年  
—二四八四  
年)

故郷は、即ち、過去の記憶と想像とを以て建立したる、神聖  
なる殿堂なり。東流の水の、海に注ぐが如く、人の想念は、この  
殿堂に向つて注ぐなり。英國の詞宗バイロンの如き、郷國に  
容れられず、憤慨の餘、郷國に向つて、最後の告別をなしてい  
はく、「余は、巖根より漂ひたる葦の如く、波瀾の涌くところ、風  
濤の呼吸するところ、泛泛として、行く所に任すべし」と。然れ  
ども、彼、またいはく、「余は、異郷の灰となるとも、余の魂は、尙、故  
郷を愛するなり」と。バイロンにして、かくの如し、これを思へ  
ば、かの大人君子英雄豪傑が、故郷に戀戀たるも、亦、決して、怪  
しとするに足らず。風雲の氣、兒女の情、豈、必しも相衝突する  
ものならんや。否、彼等は、最も多血多涙の熱腸あるにあらず



身を先帝に云云

諸葛亮のこ  
と。前出師表  
に、「臣本布  
衣、躬耕於南  
陽（中略）由  
是感激遂許  
先帝」以「馳  
驅」。先帝は、  
蜀の君主劉烈  
皇帝。

五丈原

陝西省鳳翔  
府。

遊子故郷を

悲む

漢書高帝紀に  
出づ。

や。身を先帝に致し、五丈原頭より、師を出す日も、なほ、南陽の  
舊草廬を忘るる能はざりしにあらずや。

語にいはいはく、遊子、故郷を悲むと。悲むは、愛する至なり。かれ、  
何が故に悲むか、遊子なればなり。故郷に遠ざからざれば、故  
郷の楽しきを覚えざるなり。かの田夫野人、足郷里の外に出  
でざるものは、故郷の愛すべきを覺らざるなり。若し、彼等に  
して、一度、伊勢參宮を爲さば、その晝は、見るもの、聞くもの、珍  
奇の觀をなして、更に、望郷の情を發せざらんが、旅店、人靜な  
る後、孤燈、漸く滅し、鼾聲、齁齁たる時において、頭は、木枕の上  
に在り、體は、蒲團の上に在れども、心は、故郷に歸りて、夢は、既  
に、綠秧深き處、耦耕を爲し居るなるべし。知るべし、最も、故國

ルール、ブ  
リッタニア  
英國の國歌。

安倍仲麿

遣唐留學生。  
（二）三六一年  
一四三〇  
年）

明州

今の浙江省寧  
波府の地。

を愛する情に富みたるものは、英國人にあらずば、支那人な  
ることを。即ち、飄然、家を棄てて、只、利、これ圖る英人も、一たび、  
ルール、ブリッタニアの歌を聽けば、催眠術を施されたるが  
如く、悚然として、佇立するにあらずや。支那人の如きは、最も  
出稼を爲す人民なり。彼等は出稼す、然れども、その獲たる金  
を携へて、終に、故郷に歸り來るにあらずや。蓋し、家を愛する  
念と、故郷を愛する念とは、皆、その本を一にするものなり。こ  
の念は、明星の如く、精金の如く、水晶の如く、人の想念中にお  
いて、最も粹、最も美、最も靈、最も高なるものなり。安倍仲麿、將  
に、唐より歸らんとして、明州において、月の、海上より出づる  
を見、歌うていはいはく、



天の原、ふりさけ見れば、春日なる、

みかさの山に、出てし月かも。

千秋の下、一唱三歎、人をして悽然たらしむ。これあに、能因法師者流のよくするところならんや。故郷は、一種のインスピレーションなり。琴線、一たび、これに觸るれば、無限の妙音を發す。(徳富猪一郎)

二四 諷諭

一、石清水詣

仁和寺にある法師、年よるまで、石清水を拜まざりければ、心こころううくく覺さえて、ある時思ひ立ちて、只一人、かちより詣でけり。

仁和寺 眞言宗。山城國葛野郡にあり。  
心こころ二に掛かけ  
白しろ船ふね 運うちこめ  
アアトトシシテテ ススタタハハト

極樂寺、高良 男山の麓にある末末社。

丹波に出雲 南桑田郡大社。 出雲大社なり。

極樂寺、高良などを拜みて、かばかりと心得て、歸りにけり。さて、かたへの人にあひて、年ごろ思ひつることはたし侍りぬ。聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけれ。そも、まゐりたる人ごとに、山へ登りしは、何事かありけむ。ゆゆかしかしかりかりしかど、神へまゐることことほほいいななれれと思おもひひて、山やままでは見みずずとぞいいひひける。少しのことにも、先達はあらまほしきことなり。(徒然草)

二、獅子狛犬

丹波に、出雲といふ處あり。大社を遷して、めでたく造れり。志太のなにかしとかや、しる處なれば、秋の頃、聖海上人、その外も、人、あまたさそひて、いいざざ給たまへ、出雲をがみに、かかいいももちちひひめめさせせむむとて、具ぐしももてていききたるるに、おおののおおのの拜まりりて、ゆゆゆゆし



く、信おこしたり。前なる獅子狛犬、背きて、うしろざまに立ちたりければ、上人、いみじく感じて、「あなめてたや。この獅子の立てやう、いとめづらし。深き故あらむ」と、涙ぐみて、「いかに殿ばら、殊勝（有難）の事は御覽じとがめずや。無下なり」といへば、おのおの怪みて、「まことに、他に異りけり。都のつとに語らむなどいふに、上人、猶ゆかしがりて、おとなしく、物識りぬべき顔したる神官を呼びて、「この神社の獅子の立てられやう、定めて、習ある事に侍らむ。承らばや」といはれければ、「その事に候ふ。さがなきわらはべども、つかまつりける、奇怪に候ふことなり」とて、さし寄りて、据ゑ直して去にければ、上人の感涙、いたづらになりけり。（徒然草）

二五 國民の抱負 その一

太古は漠たり、史筆以來、世界の文明は、全體上より觀察すれば、滔滔として進行しつつあるなり。而して、世界諸國の歴史の河流は、遲速の別こそあれ、遂には、世界歴史なる、一大潮流に朝宗する運命を有するものの如し。然れども、世界の文明に、力を致すにおいて、各國、各、その趣を異にせざるなし。古昔において、猶太人は、地上に、神の王國を建つるを以て、その覺悟とし、希臘人は、文藝學術を傳播するを以て、その天職とし、羅馬は、世界の帝王を以て、自ら任じ、蠻夷の襲撃を受くる曉において、なほ、世界の女王たる位置を保ち、遂に、政權を刹

朝宗  
書經禹貢に、  
「江漢朝宗于海」。



自由權利

自由權利

奪せらるるに及んでは、法王政を建てて、精神的帝王となり、世界に君臨したりき。降つて、近世に至り、英人を見るに、かれらは、己が運命は、海上權を掌握し、遠隔の地に、殖民をなすにありと信じ、米人は、その國土を以て、あらゆる方面に、自主自由を發達せしむる舞臺となし、獨人は、科學、および、政治の上より、世界に、一大寄與をなすを以て、その抱負となし、佛人は、人間的の思想感情を、世界に廣布するを以て、その任務と信じ居れり。而して、これ等國民が、文明の潮流に、力を致す模様を見るに、終始間斷なく、力を致すことは、甚だ稀にして、恰も、流星の、天に顯れて、忽ち滅するが如く、きはめて短き時限中において、その國民特有の性質上より、斬新なる寄與をなし

て、世界の文明を鼓舞し、一度、その職分を盡し了ふれば、その國は、疲勞衰頹して、時機、再び到來し、元氣恢復するまでは、永く、沈靜の狀態に歸するものの如し。

尤も、一方より見れば、諸國民は、間斷なく、世界の潮流を潤澤しつつありと謂ひ得ざるにあらず。然れども、最も著く、世界の文明を鼓舞し、諸國民注意の燒點となり、世界を震動風靡する國民は、一時代においては、大抵、ただ、一あるのみ。

希臘の盛なるに當つてや、世界の諸國は、睡眠の中にあり。羅馬起れば、希臘は、既に廢れたり。近世において、佛國の、驚天動地の活劇を演ずる時は、英國、しりへに、瞠若として退き、米國の、獨立自由の旗幟を樹つるに當つては、世界の諸國、呆然



として、爲す所を知らざるものの如し。かくの如く、世界の勢は、同時に、各所に發動するものにあらずして、一定時には、一定所を限りて、その集合點となし、そこにおいて、破裂す。而して、その破裂の餘波は、數十百年に亙ることありと雖も、その破裂するは、實に、一刹那の間にあり。而して、この破裂は、實に、その破裂の座となりたる國土を以て、世界文明の寄與者たる資格ある者なることを吹聴廣告するなり。

余輩、近世の歴史を讀んで、私に思ふ、世界の勢が、歐米の土に破裂するの時限は、最早過ぎ去りつつあるにあらざるかと。歐米諸國、今日の運動は、頗る盛なれども、こは、むしろ、過去破裂の餘勢によりて動くものにして、大勢破裂の中心點は、

漸く、東方の國土に回轉しつつあるにあらざるかと疑ふ。太古においては、東洋の國土は、實に、世界大勢の破裂點となり、世界文明の潮流は、その源を、東洋に發したりしなり。東洋の諸國民が、世界の活劇を演じ、偉大の功績を奏したる時に於いて、西洋諸國は、憐にも、暗黒の裏に蠢動したりき。而して、東洋諸國は、この勢の去ると共に、漸く沈靜し、支那、印度を始め、埃及、アッシリア、ベルシアの如き、皆、化石の状態に陥りたりしなり。而して、この間、世界の陽氣は、西洋暗黒の地を攪破し、希臘時代以來、今日に至るまで、いはゆる西洋文明を發顯せしめたり。然れども、陽氣大勢の回轉は、間斷なきものにして、永く、一所にとどまるものにあらず。今は、再び、東洋の國土を



以て、その發顯點となし來るものの如し。わが日本の國土の如きは、東西兩洋を括約する位置を占めたるに、しかも、古來いまだ曾て、世界大勢の破裂する場所とならざりしは、頗る怪むべきことなり。大勢破裂は、支那、印度に起り、ヘルシアを経て西漸し、歐洲諸國を横ぎり、大西洋を渡り、米國に達したるなり。もし、この大勢、再び、その發起點にかへるべきものとせば、必や、まづ、わが日本の國土を以て、破裂點とせざるべからず。わが日本が、世界諸國民注意の燒點とならんとする豫報は、已に、世界に傳播せられたり。日本が、遠からずして、世界文明の潮流に對し、一大寄與をなす地位に立つべきは、火を睹るよりも明白なり。

## 二二六 國民の抱負 その二

然れども、日本は、世界の文明に對し、如何なる寄與をなすべきか、こは、今日、わが國民の覺悟によりて、定るべきものにして、寄與すべき事柄の詳細に至つては、今日より、これを明言し得べからずと雖も、少くとも、日本國民の特質上より、一種の寄與をなすに至るべきは、過去における各國寄與の模様を見て、明に、これを推すことを得るなり。さては、日本國民は、世界に對して、如何なる抱負を有すべきか、これ、今日の識者先覺が、深思熟慮すべき一大問題なり。世界の大勢は、日本人をして、如何なる事を、世界に宣傳せしめんとしつつかある



か、大勢は無聲無言なり。識者先覺は、大勢を悟了し、これをして、聲あらしめ、形あらしめざるべからず。もし、偉大なる先覺ありて、この大勢が、言はんと欲して、言ふ能はざるところを、國民に宣傳するあらんか、國民の心は、譬へば、せかれたる水の、堰を開かれたる如く、滔滔、大河となりて、その進むべき所に流れ行かん。わが輩は、一日千秋の思をなして、日本國民將來の覺悟抱負を宣傳する大指導者の出でんことを希望して、止む能はざるなり。

わが輩、しばらく、維新時代に立ち返り、當時の英雄偉人が、思惟したる所を見る時は、その中に、おのづから、わが國民が、今日の覺悟として、可なるものを發見せずんば、あらず。維新

一視同仁  
韓愈の原人  
に「聖人一視  
而同仁」。

の俊傑、多くは、天下を以て、自ら任じたる人なり。かれらは、如何なる事を以て、日本の抱負とし、如何なる事を以て、日本の覺悟としたるか。かれらは、大義名分を、四海に布くを以て、日本の抱負とし、權謀術數を去り、至誠、世界に立つを以て、日本の覺悟とし、一視同仁に、天地の大道を體し、天に代りて、世界の横道を説破し、討伐し、勦誅し、萬國安全の道を示すを以て、日本の天職と考へたるなりき。その元氣の壯なる、人をして、覺えず奮興せしむるものあり。この元氣と、この覺悟とありしが故に、維新の改革は成就せられ、鎖港攘夷の陋見は打破せられしなり。維新以來、日本が、駸駸として進歩し、今日の如く、多少の力量を有する國となれるは、實に、この元氣と覺悟



とありしが故なり。わが輩は、日本人には、種種の缺點あるを  
 知るものなり。日本人は、なほ、幾分の修練と困難とを經過せ  
 ずては、決して、大國民となる能はざるを知るものなり。然れ  
 ども、世界中において、大義名分の爲に狂奔し、忠誠の爲に、一  
 身を抛つこと、土芥も雷ならざる民ありとせば、まづ、指を、日  
 本國民に屈せざるを得ざるべし。至誠の極、或は、輕卒の舉動  
 に出で、大事を誤る同胞なしとすべからずと雖も、身を殺し  
 て、仁を成す覺悟を爲すにおいて、極めて敏速に、死して悔な  
 き、日本人のごときは、世界國民中、多くあらざるところなり。  
 日本人は、道德義務の念に沸騰する國民なりといふとも、誰  
 か、然らずといふ者あらん。果して然らば、日本が、世界の文明

身を殺して  
 云云  
 論語に、「子  
 曰、志士仁人  
 無<sub>二</sub>求生<sub>一</sub>以  
 害<sub>二</sub>仁<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>殺<sub>一</sub>  
 身以成<sub>二</sub>仁<sub>一</sub>」。

に對して寄與すべき、最大なるものは、道德上の教訓にあら  
 ざるか。日本は、道德上において、世界の師表となり、世界より  
 私慾の汜濫を排除する、一大任務を有し居るにはあらざる  
 か。

日本帝國が、開闢以來、絶海に孤立し、世界の腐敗の外に超  
 越し、清潔美麗なる風土山川に養育せられ、君臣、父子、夫婦、朋  
 友の道正しく、大體上よりいへば、殆ど理想的の國家を經營  
 し來れるもの、他日、大いに、世界の腐敗を掃蕩するが爲には  
 あらざるか。天下の微弱を扶持誘掖し、驕傲無禮を掣肘壓倒  
 し、世界の私心を根絶し、道德上の帝王となりて、世界に君臨  
 するは、日本が、その特質上より、世界の文明に對してなすべ



漢  
英之由  
画キ

教育部省檢定濟 中國語科用校 明治四十五年八月一日

修訂中等國語讀本卷七

一三二

き、最大寄與にあらざるか。わが輩は、日本が、天地の大道の化身となりて、萬國民を警醒する、大抱負大覺悟をなすべき時機の到來せるを見て、欣喜措く能はざるものなり。(大西祝！  
大西博士全集)

修訂中等國語讀本卷七終

修訂中等國語讀本(全十册)

明治四十四年十月十四日修訂印刷  
明治四十四年十月十八日修訂發行  
明治四十五年一月五日修訂再版印刷  
明治四十五年一月八日修訂再版發行

定價 各卷金貳拾五錢

著者	故落合直文
相續者	落合直幸
補修者	文學博士 萩野由之
補修者	文學博士 森林太郎
醫學博士	
發行兼印刷者	東京市神田區錦町一丁目十番地 三樹一平



發行所

東京市神田區錦町一丁目  
【長電話本局二四三八番】

明治書院

(振替貯金口座四九九番)





